



蘭使日本紀行

四

ル 3
1138
4



門ル3
號 1138
卷 4



禁裡御所

山カ桃山ト名クル美味ノ果實ヲ出ス山ヲ見ル
又別ニ遠見櫓アリ其下ニハ美麗ナル武具庫アリ
其右ニ僧徒ノ六層塔アリ此寺ニハ日本高位
ノ僧アリシヤシヤシヤト名ク世ヲ棄ルノ意
ニ出ツ

都府ノ中位ニ皇帝居住ノ宮殿アリ堂宇高ク聳
ユ以テ安全ヲ防護スルナリ抑モ皇帝ハ足地ニ接
スルナシ日輪頭ヲ照ラスナシ露天ノ下ニ
立ツナシ髮髭及爪ヲ短截スルナシ内裡ノ
膳ニ供スル諸食物ハ毎回新器ニテ調理シ新器

ニ盛ルナリ。

右側ニ帝居アリ山ニ倚ル故ニ大改ヨリ京都ニ
来ル人見ルヲ得ス然レモ高塔アリ其尖端山上
ニ出ツ是信長ノ巨額ヲ費シテ建築セシ所ナリ
曩ニ亂黨アリテ公方ニ抗セシキニ兵火延テ帝
居ニ及ヒ終ニ灰燼トナリタルヲ再築セシナリ
園圃樹木多ク粧飾克備天工人工盡サハルナシ
大ニ歡樂スヘク又驚駭スヘシ

兩側ニ公^經候^神ノ邸宅アリ皆日々^皇帝ニ近接スル人
ナリ建築相競テ壮大ヲ極ム此一局部ニ^内精巧職
工ノ一世界アリト云フモ可ナリ

帝居ノ左側ニ一高塔アリ金板ヲ以テ覆フ其尖
殆ント天ヲ衝ク帝居ノ下流ニ浴ヲ十二宮アリ
許多ノ婦女ヲ住マシム帝意ニ任セテ之ヲ撰ハ
シム

許多ノ建築アリト虽就中最モ盛ナルハボンシ
ヤウセン長ノ宮殿ナリエグラムニツト名ク学
問ノ光輝トノ意ナリ是ヲ距ル教寺ニノ内府公
ノ宮殿アリ京都ヲ距ル一四里ニアリ

更ニ四角三層ノ堂宇ウカラス皆高ク雲ニ入ル

鍍金セル大佛アリ。日本諸國ヨリ群集參詣スル所ナリ。

シヨクツンシノ役所ハ頗ル壯大ナリ。運上所ハ激ノ門ニ接シ。我輩阿蘭使節之ヲ通過シテ大坂ヨリ来ル所ナリ。茲ニテ通行鑑札ヲ示シ尋常ノ賃賃ヲ拂フヘキナリ。

運上所ノ左側ニ非常ニ結構ナル寺アリ。屋脊上ニ三尖アリ。内ニ影シキ佛像アリ。全全年ノ日敷ニ同シ。毎日順次ニ一像ヲ轉位シ。之ヲエグラムニツレノ尊ニ置ク。一夜空シク消過スレハ其僧無難ニ堂ニ入ルヲ得ス。

護兵ノ宿所ニハホンロコウバクライドノ住シ。三層屋ナリ。非常ニ立派ナリ。其傍ニ遠見櫓アリ。晝夜警固スル兵卒二千ナリ。京都ノ末端ニ騎兵營所アリ。四萬人ノ兵ヲ納ルヘシ。

尋常市街ノ家屋多クハ極テ華麗ナリ。房室頗ル多シ。以皆要アリトテ可トス。各室襖ニテ分界シ。金彩燦爛タリ。容易ニ開閉スヘシ。室ノ大小。臨時適宜ニスヘシ。京都ハ日本ノ他地ニ比スレハ最モ繁華ナリ。盖シ兵馬ノ權ヲ武家ニ歸セシ以來敢テ不羈ヲ

謀ル者ナク。又内裡ヲ保護スル。鄭重ニ由ル。
 河蘭使節フリヒウス氏及ブルトクホルスト氏。
 京都ニ逗留一夜ニノ。十二月二十一日。大津ニ向
 テ出^上足^下ス。其道山間ニ在リ。往々人家アリ。側ニ一
 城アリ。大湖水ノ角ニアリ。使節ハ大津ニテ休息
 セシト欲シタレ。疾^疾急^急速^速ス。キールアルニ由テ。膳
 所ヲ通過セリ。平ナル並^並木^木道^道アリ。两侧樹木ヲ植
 テ美觀ナリ。其端ニ一村アリ。水ニ臨ム。其前面ニ
 膳所城アリ。二條ノ河アリ。一ハ小木橋ヲ架ス。第
 二橋ハ大ニノ。長サニ百三十歩ナリ。

此路上ニ乞丐多シ。日本全國皆同シ。多クハ教子
 ヲ伴フ。手ニ文庫ヲ捧ケ。内ニ施物ヲ集メ貯フ。母
 ハ木鉢ト瓢箪トヲ携テ。各々紐ヲ繫キ以テ帶ニ
 締フ。木鉢及瓢箪ハ腹上ニアリ。其下ニ財布ヲ置
 ク。帝^{將軍}ノ為ニ禁セラレテ。全家婦子孫ヲ携テ。廻國
 スルアリ。小兒及老人ハ四角ナル籠ニ納レ。綱ニ
 テ前後ノ牛角ニ固結シ。以テ伴行スルアリ。相前
 後シテ。日本前哲ノ善行ヲ記スルノ歌ヲ唱フ。浴
 戸之ヲ唱テ。施物ヲ請フ。
 膳所ヲ過テ。日暮草津ニ達セリ。頗ル險道ヲ經。夕

リ此地ニ有名ナル日本杖アリ。椎キ莖ハ快味ノ
液ヲ多生ス。内部ハ海綿状ナリ。極テ柔靱ナリ。連
々結節アリテ上邊次第ニ細シ。此莖編ムヘシ。是
ヨリ大船ノ碇綱ヲ製スヘシ。真水ニ耐エルノカ
ハ麻綱ニ異ナラス。又之ヨリ各種ノ篋、笥等ヲ造
ルヘシ。歐羅巴製ノテーン細ユニ勝レリ。各戸競
テ之ヲ販ク。

未明ニ出立シ。石部ニ達スルニ日未夕上ラス。石
部ヲ距ル一ニ里ニノヨカタ川アリ。十時ニ水口
ニ達セリ。一城アリ。大道ヲ徴スルニ足ル。水口ニ
至ルマテハ道路平坦ニノ。両側ニ樹木及稲田ア
リ。大ニ遠望目ヲ喜ハスヘシ。是日本米ノ最上品
ヲ産スル地ナリ。印土海ニ輸出スルノミナラス
更ニ歐羅巴ニモ至ルナリ。稲ヲ収穫スルハ九月
ニアリ。最上白米ハ最モ貴價ナリ。暹羅或ハ百露
ニ産スル品ハ大ニ廉ナリ。日本人モ印土人モ粉
末ヲ製スルノ碾ヲ知ラス。故ニ歐羅巴人ニ擬シ
テ蒸餅ヲ製スルヲ知ラス。米亦蒸餅ヲ製スヘシ。
然ルニ水ヲ和シ煮テ糜トナシ食膳ニ供シ。或ハ
乾カシテ固塊トナシ食ス。粒米ヲ生食スルハ不

可ナリ。非常ノ大腹痛ヲ発シ衰弱セシム。或ハ煮
 タル米ヲ焙リ食物ト為ス。アリサヘリウス氏
 曰ク余曾テ此ノ如キ米ヲ食シテ日本ヲ旅行セ
 シ。アリ。久シク袖中ニ隠レテ生活セリト。田ニ
 在ルノ稻ハ多肉ノ葉アリ。ビースローク蒜ノニ
 異ナラス然レニ潤シ地上ニ出ル。一尺許紫色ノ
 花アリ。重畳セル圓根アリ。ブリニウス氏曰ク印
 土人ハ如何シテ米ヨリ一種ノ油ヲ搾ルヤト然
 レニ。當時日本及全印ニテ一般ニ米ヨリ酒ヲ
 製スルナリ。

水口ヲ出テ一峻山アリ。大ニ旅具輸送ニ難ノリ。
 既ニノ土山ヲ經テ坂下ニ至リ一泊ス。
 翌朝日出一時前ニ月光ニ乘シテ出足ス。水及道
 上凍返ス久シクノ亀山ニ達ス。高塔アリ雲ヲ衝
 ク。城ノ四邊白石ヲ以テ築ク。挺テ堅固ナリ。能ク
 損害ヲ免カルヘシ。其下ニ立派ナル市街アリ。更
 ニ前行三里ニノ石薬師ニ至ル。
 午餉スルニ方テ農夫及農婦ノ来テ蔬菜ヲ販ク
 アリ。農夫ノ衣服常人ニ異ナラス。犢ニ乘テ通行
 ス。犢鼻ニ貫クノ鈎ニ索ヲ繫ケ。両角間ヨリ耳ニ

三

沿テ之ヲ纏フ。以テ續ヲ導クヘシ。農婦ハ
足下ニカラム。ピ。網ヲ卷キ付ル。為ニ付
脚ヲ踏ミ。拇趾ト第ニ趾トノ間ニ糸卷ヲ狭ム。脚
ヲ纏ヒ。網ヲ交叉シテ結フナリ。

注野

追分。オワカ。四日市。及富田ヲ經テ。桑名ニ至

ル。日没ニ。以テ市ニ入レリ。人家稠密ナル。大ニ他

地ニ過ク。周回ニ堅堤アリ。高城アリ。石ニテ築ク

塔。塔高ク。聳ユ。

京都ト桑名トノ半道ニ盛ナル町アリ。ピオンゴ

ト名ク。往年公方ノ薨後。信長ノ軍ノ為ニ大ニ潰

破セラル。又千五百九十六年地震ニ過ヘ。半市ノ

家屋寺院人畜土中ニ埋没セリ。

日本ニハ屢地震アリ。下。亞米利加ニ於ケルカ如

シ。又千六百十九年二月四日。ペリユアンセノトリ

ニギル。頻回震動セリ。則チ正午前ニ地震始マリ

瞬時間ニ百六十度ニ及ヘリ。而ノ連震十五日更

ニ空中尾星ヲ現シ。大ニ人ヲ驚怪セシナリ。

加拿太ノ地震亦頗ル劇シ。千六百六十三年二月

五日。空中鳴動シ。次テ人家壁震ヒ。柱倒レ。樹木相

觸テ。磨軋ス。テリ。リ。ヒ。レ。ン。市ノ森林アルニ

山顛覆シ。山顛レテ海ニ入り。中間一堤ヲ作り。陸地ニ一新流ヲ現ス。又別ニ山顛レ。樹倒ルアリ。バウエルス村ニテハ丘ヲ流没シ。川中一島ヲ現ス。日本ハ柳モ地震多キ地ナリ。

柔名ヨリ水路宮ニ至ル。其間大ナル入江ナリ。水路ヲ取レハ迂路陸行スルニ比スレハ雜費少ナク。且時刻ヲ消スル一短ナレハナリ。小船ヲ雇フ一十六艘以テ旅具人馬ヲ送レリ。兩地間隔スル一七里ナリ。海上風ナシ。故ニ中夜ニ始テ宮ニ達セリ。此地ハ繁華ニノ家屋立派ニノ寺院アリ。海

岸ニ沿テ堅城アリ。宮ニ一泊ス。

(八五)

千六百四十九年十二月二十四日。宮ヲ出立シ。鳴海及池鯉鮓ヲ經テ岡崎ニ至ル。此地ハ人戸稠密。城郭堅固ナリ。能ク強敵ヲ防ク一シ。此市ヲ經レハ一木搦アリ。長サ三百八十八步。旅具ヲ運輸ス一シ。茲ニテ午餉シ。藤川ヲ過キ。赤坂ニ達ス。道路極テ美麗ナリ。或ハ小流アリ。或ハ山アリ。平地アリ。總テ樹木多シ。

赤坂ニ一泊シ。十二月二十五日。御油ヲ經テ吉田ニ至ル。又一大木橋アリ。吉田ハ頗ル美地ナリ。周圍

ニ山アリ樹木多シ道ノ両側ニ樹木アリ上邊ノ
杖相錯綜交叉シテ旅人ノ為ニ雨ヲ防キ又日光
ヲ遮ルニ足ル

十時ニ川ニ至ル此地ニテ奉^鎮行^正ノ一隊ニ逢一リ

譯官ノ説ク所ニ日本帝ノ命ヲ奉シテ江戸ヨリ

大坂城ニ在勤スルナリ年々交代スルヲ例トス

前驅アルノ後奉^鎮行^正ハ輕騎ニ駕シ後從ニハ旅具

アリ歩卒アリ騎馬士アリ騎馬士ハ能ク習熟セ

ル馬ニ騎ル弓矢長鎗更ニ双劍ヲ佩フ一短一長

ナリ頭ニ藁帽ヲ戴キ脚ニハ漆塗ノ長沓ヲ穿ツ

歩卒及騎馬運歩整然肅然トノ一語ヲ吐ク者ナ

シ連行列ヲ為ス一殆ント半時程ナリ

十一時白須賀ヲ經海濱ニアリ右側大海アリ左

側ニ高山アリ樹木多シ白須賀ヲ經テ新居ニ達

ス是大海ノ入海トナル所ニテ其洞サ一里半但

シ甚ク浅シ故ニ旅具ヲ輸送スルヲ易カラス舟

底地ニ磨^膠スルヲ頻回ナリ入海ノ前岸ハ舞坂ノ

端ナリ

是ヨリ各種ノ丘ヲ經兩側列樹アリ日暮濱松ニ

着ス

六

天明前途ニ就ク舟ニテ天龍川ヲ涉リ見附ニ至
ル繁草ノ地ナリ立派ナル城アリ見附ヨリ袋井
ニ至ル午餉ス而ノ掛川及日坂ヲ經日坂ニハ金
谷山アリ長サ一里半山路極テ美麗兩側樹木多

之

其山ノ高所ニ尖頂アリ左側ニ高大ナル屋寺院舗アリ
密樹間ニ堂宇高塔隱見ス樹木ハ空中ニ聳ユ
日本譯官ノ説ニ是日本大學校ノ一ナリ僧徒多
シ屋外ニ出ル一ナシ常ニ學事勉強ス年々定時
ニ諸方ヨリ全國ノ僧徒集會シ佛教及理學ヲ討

論研究スト但シ此話怪シムヘシ絶テ
一僧徒ヲモ見サルカ故ニ之ヲ譯官ニ
詰ルニ其答辭曖昧ナリ又阿彌陀或ハ
釋迦ヲ尊崇スル為ニ其身ヲ牲ト為ス
一アリ故ニ日本人自死スル者多シ
其佛ヲ見シ一ヲ大ニ願フキハ自テ其
生ヲ滅スルナリ則チ先ノ致日間施物
ヲ集メ之ヲ溜キ袖ニ納メ市中ニ出テ
佛恩ヲ尊崇スルノ意ヲ説ク衆人之ヲ
善行ト看做シ之ヲ德德ス是ニ於テ銳

利ナル録ヲ取り。往生スヘキ地ニ生スル
ノ荆棘ヲ刈除スルナリトス。既ニノ小舟
ニ乗シ。重キ石ヲ頸臂腹及脚ニ繫キ。勇
ヲ奮テ舟外ニ飛出テ。或ハ舟底ノ栓塞
ヲ抜キ。舟ト共ニ水底ニ沉没ス。其舟外
ニ飛出ル片ハ。朋友及送者大ニ火ヲ投
シテ。遺舟ヲ燒キ以テ。存生中善行ノ好
果ヲ得セシムヘシトス。

水底に生る者ハ
ハ

イェリットロゲウエーキ。フロシウス氏曰ク。余
京都ニ赴カントスル中。ヒノ島ヲ出ル。八日前ホ
レ小市ニ来レリ。此地ニテ。六男ニ女溺死スルヲ
見タリ。人民海岸ニ接シテ。之ヲ尊敬スル。為ニ一
堂ヲ造リ。柱及松樹ニテ構フ。堂内壁アリ。多ク小
技ヲ挿ム。此小技ニハ。紙片ヲ懸ケ。水死ノ靈ヲ阿
彌陀ニ導カシムル。為ノ經文ノ語ヲ記ス。衆人日
夜參詣禮拜スルナリ。トフロシウス氏曰ク。余口
デウエーキアルノイゲト共ニ。其方ニ進ミタル
ニ五人ノ老婦アリ。堂ヨリ出テ来リ。薔薇花簪ヲ

執リ口内ニテ喃々低語シ。余輩ヲ嘲弄シ。禮拜セ
スシテ堂ニ入ルヲ制止ス。

カスベルヘルレア。千九百六十二年。塚ヨリ書ヲ

寄ス曰ク。余自ラ此ノ如キ溺死ヲ見ル。數回ナ

リ。抑モ日本人ハ。極樂ニ往生スルヲ得ル。件ハ。極

樂ハ。或ハ海底アルヤ。或ハ他所ニアルヤ。固ヨリ

知ル。一キニアラス。唯其地ニハ。各種ノ佛アリテ

信者ヲ容レ。能ク之ヲ保存スト云フ。數日眠ラス

常ニ盛膳ニ侍スト。此教法ハ。間接ニ施物ヲ受ケ

他ノ同志ヲ募ル。最後ノ日ニ於テ。同黨長寛話シ。一

盃ニテ。共ニ飲酒シ。後舟ニ乘ル。此小舟中ニハ。利

鎌アリ。蓋シ。極樂ニ赴クノ途中ニアル。荆棘ヲ刈

除スルノ用ニ供スト云フ。各人美服ヲ着ケ。袖裡

ニ石ヲ滿テ。頸ニ重石ヲ掛ケ。以テ速カニ海底ニ

達スルヲ期ス。余見ル所。一回ハ。七人黨ヲ為スナ

リ。共ニ勇ヲ歎シテ。海ニ入レリ。唯異状ヲ驚クノ

外ナシ。

日本人ニハ。此ノ如キ妄談ヲ大ニ唱フル者アリ。

之ヲ山武士ト称ス。猶山野ニ廻歩スル兵士ト云

フ。如シ。然レ。此尊称ヲ得ルニハ。頗ル困難ヲ

經苦業ヲ修メ長時怠ラサルヘキナリ長覺五十
時ナルヘシニ晝夜眠ラサルヲ云フ粗食シ奇異
ナル撰生ヲ行フ或ハ山林ニ住ミ魔神ヨリ病者
ヲ救フノ秘訣ヲ受ク或ハ死者ヲ蘇生セシノ巧
ニ死ヲ起スヲアリ山武士ニ三月間苦業ヲ經テ
長覺漸食スルモ妨ナキニ及テ始テ同船スルヲ
得ルナリ則テ共ニ水底ニ沉没スルナリ
日本人ハ死ヲ恐ル者ヲ好色人ナリトシ又更ニ
不信心ナリトス凡ソ阿彌陀釋迦及他佛ノ教法
ヲ奉スル徒ハ天堂說ヲ信スレハナリ此說ハ近

來日本ニノミ始テ行ハルニアラス歐羅巴ニテ
ハ千五百年代ニ既ニ唱フル所ナリ信心者殊ニ
死ヲ厭ハサル者ハ衆人一同ニ或ハ佛祖ヲ尊奉
スルニ由テ暫短時ノ生活ヲ棄ル後永久ノ幸福ヲ
得ルトスルナリセルテ此名ヲ冒スルヘキハ
ボリトユンス西班牙人ガルロイセル
ス及獨逸人ナリハ舊羅甸詩人リユカニユス
ノ詩ヲ唱フ
北方ヲ見ル人民ハ誤慮ニ由テ幸福ナリ死ヲ
恐ルハ恐ノ大ナル者ニアラス之ヲ軍神ニ捧

ク恐レスノ死スヘシ他ノ嘲弄ノ為ニ生活ス
再来ヲ生ヲ惜ム然レモ別世界ニ於テハ精神
能ク固有ノ体ニ入ルナリ

死後再生ノ説ハ總テ一釋テ教ニテ一般ニ唱

フル所ナリ歐洲人ノ外ニモ往時ヨリ之ヲ唱ヒ

今尚然ルアリ西印土東印土共ニ然リ此信實ナ

ル証ハ舊時ノ東印土ニハ示ス所ナシストラボ

ハ証ヲノカステネスニ取ルインジセブラハマ

ネスハ死ニ就テ議論紛起ス生命ハ始テ受ケタ

ル人ノ現象ナリトセサル可ラス然レモ死ハ世

事ニ熟セル人ヲ真且幸ナル生ニ尊クナリ又ス

トラボハ舊ブラハマネスマンダニスノ話ヲ

トキサレドレデゴロドニ附セリ其凱戦ノ効

ヲ奏スルハ死ヲ尊フニ由ルトシ安樂生活ヲ想

像スルヲ望ム者ヲ足ニテ蹴ル彼大聲ニ

サレドレヲ嘲リ曰ク余決シテ汝ノ毒物ヲ要ト

スルヲナシ何トナレハ汝自ラ飽キタルニ非サル

ヘケレハナリ余汝ノ脅迫ニ驚クヲナシ何トナ

レハ生活スル印土人余ヲ養育スレハナリ然レ

モ死後ハ靈魂此老衰頹敗スルノ体ヲ脱シテ更

壙山王

壙山王

ニ佳ニノ清潔ナル別生活ヲ得ヘケレハナリ。
シセロ氏印土カラニユス床下ニテ自ラ火ヲ焚
キニ就テ藁ヲ被ヒ徐々ニ手ヲ焼キ曰ク鳴乎塵
世ヲ脱シテ幸福ノ地ニ赴ク哉ト。

以上諸件ニ由テ上ニ記スル日本人ノ説ハ當ニ
古来ヨリ唱フルノミナラス更ニ印土ニテ之ヲ
唱ヒ之ヨリ支那ニ入り日本ニ傳フル所ナルト。
容易ニ知ルヘキナリ又前ニ日本譯官説ク所ハ
一坊主教年間コナイ山ノ寺院内ニ集會シ又屢
市中ヲ往来シ終ニ去テ行ク所ヲ知ラサルアリ

ヘルレラ書中ニモ記ス曾テ一坊主アリ塚ノ市
中ニ住ス富饒ニノ信心ナリ齡七十歳重病ニ罹
リタルニ午食後衆人ノ眼前ニ於テ形ヲ隱シ再
後行ク所ヲ知ラスト。

寺院ヲ左ニ見テ山巔ニ上リ之ヨリ下テ金谷ニ
一泊ス翌朝大井川ヲ渉ル久シク雨ナキヲ以テ
容易ニ舟行ルヲ得タリ蓋シ此川ハ高水急流ナル
片ニハ之ヲ渉ルニ大ニ用危苦スル所ナリ。

其前岸ヲ步行シタルニ偶將軍手家ノ鷹匠三人ヲ見
タリ將軍手家ノ威權ヲ帶フルヲ以テ騎馬ノ者ハ皆

下馬セリ。而ノ使節ハ其人ノ過キ去ルマテ歩ヲ
停メリ。次テ島田藤枝及岡部ヲ經峻山ヲ越テ鞠
子ニ達ス。

少時ニノ駿河ニ至ル。大城アリ。但シ方今無住ナ
リ。故ニ紳士多クハ他地ニ轉移セリ。蓋シ千六百

二十九年職ニ就ク。徳川將軍帝ノ弟君薨去以後高賈業

大ニ凋落セリ。此君其兄ニ對シ不滿ヲ懷ケリ。故
ニ止ムヲ得ス。割腹自裁スルニ至レルナリ。

此割腹スル状左ノ如シ。東邦ノ習慣ニテ罪人ハ
脚ヲ折テ着坐シ。宮外閑谿ノ地ニ於テ上身ヲ露

裸シテ。腹ニ至ル。其後側臥人アリテ衰弱煩惱

スル。片ニ之ヲ補佐スルナリ。前ニ一人アリ。割腹

スルノ刀ヲ授ク。十二人ノ朋友親戚列坐ス。介酌

人ノ後ニ僧アリ。遺体ヲ葬ル為ナリ。更ニ兩側ニ

警護ノ多人アリ。

此ノ如キ残酷ヲ無罪ノ人ニモ加フルナリ。是

國法ノ許ス所ナリ。則チ一人死罪ニ處セラレ。片

ハ連累多人ニ及フナリ。フランコシスカコン氏

曾テ江戸ニ於テ見聞セシ一話ヲ記ス。一官紳一

地方ヲ宰セリ。過多ノ年貢ヲ取納セシメ。以テ自

九一

全振四時三割腹

う之ヲ私ス。終ニ農夫ヲ貧困ナラシムルニ至レ
 リ。是ニ於テ裁官大ニ之ヲ紕彈シ。貴紳罪ニ服シ。
 全族割腹ヲ命セラル。其一弟ハ備後候ニ仕テ。江
 戸ヲ距ル。西百四十六里。一伯父ハ薩摩ニ仕テ。
 更ニ遠キ。一ニ百里。一子ハ紀伊候ニ仕テ。第二子
 ハ東方百十里ニアリ。松前候ニ仕テ。第三子ハ王
 城イニクワノニ仕テ。季子ハ大坂屬高某ノ娘ニ
 替ス。更ニ二弟アリ。平家ノ與カタリ。此諸人其父
 或ハ其兄タル罪人ト同日同時ニ割腹セリ。
 此残酷ナル刑ヲ行フノ法左ノ如シ。預メ其時日
 ヲ罪人ニ報シ。而シテ罪人北向シテ。自裁スルノ狀
 上ニ記スルカ如シ。
 此連累ノ大坂商人ニ及フヤ。最モ苛酷ナリ。其娘
 モ断食スルヲ十一日ニ及ヒ。餓死セリ。他ノ妻子ハ如何
 セシヤ。聞ク所ナシ。
 カスベルヒルシ。而シテ平戸ヨリ一書ヲ寄ス。曰ク
 千五百五十七年十月三十日。此割腹ノ事ヲ見聞
 弘治三。是國主ヨリ罪人ニ死ヲ賜フナリ。則チ使者
 ヲ送り死ス。一キノ時日ヲ領知セシム。罪人半奪
 セス。謹テ使者ニ就テ。王ニ請テ自裁セン。一ヲ求

〇既ニ許可ヲ得レハ。以テ無限ノ大衆ト為ス。定
 時ニ至レハ。貴重ナル劍ヲ執リ。腹ヲ上下左右ニ
 貫ル。逆十字状ニ割クナリ。然レハ將軍王若シ自裁ヲ
 許サハル。片ハ其子弟。從僕。及舊友ヲ呼ヒ集メ。屋
 内ニテ圍戰スルナリ。兵ヲ遣テ。本罪人ヲ延キ。先
 フ遠所ヨリ矢ヲ放テ。漸ク近クニ及テ。鎗劍ヲ用
 フ。終ニ全家族ヲ殲シ。永世報入タルヲ表ス。
 但シ此ノ如キ。豪刑ハ貴人。武人。商人。紳士。及農人
 ニ施ス所ナリ。政府ニ對シテ詐欺スル者。ハ皆自
 裁セシム。血ヲ以テ刑スルハ。日本ノ習慣ナリ。然
 レハ高僧王公ノ罪ヲ侵スハ。之ヲ豪スル。極テ緩ナ
 リ。則チ八丈島ニ追放スルナリ。是小島ナリ。周回
 僅カニ一時行程ノミ。江戸ノ東ニアリ。相距ル。一
 百四十里。斬巖兀立シテ。破泊スヘキ地ナシ。故ニ罪
 人ヲ送ルノ外。他船ノ来ル者ナシ。好晴ヲ見テ。僅
 カニ航スルノミ。危險言フ可ラス。其舟ヲ引拳ク
 ルノ状。猶大工ノ棟梁ヲ架シ。足場ヲ組ムカ如ク
 ニ。綱ヲ引テ。空中ニ登ラシムルナリ。此ノ如ク
 スルニ非サレハ。微風アルモ。舟岩礁ニ衝突シ。破
 裂スルナリ。此法ヲ設ケサルノ前。屢舟ヲ損傷セ

〇既ニ許可ヲ得レハ。以テ無限ノ大衆ト為ス。定
 時ニ至レハ。貴重ナル劍ヲ執リ。腹ヲ上下左右ニ
 貫ル。逆十字状ニ割クナリ。然レハ將軍王若シ自裁ヲ
 許サハル。片ハ其子弟。從僕。及舊友ヲ呼ヒ集メ。屋
 内ニテ圍戰スルナリ。兵ヲ遣テ。本罪人ヲ延キ。先
 フ遠所ヨリ矢ヲ放テ。漸ク近クニ及テ。鎗劍ヲ用
 フ。終ニ全家族ヲ殲シ。永世報入タルヲ表ス。
 但シ此ノ如キ。豪刑ハ貴人。武人。商人。紳士。及農人
 ニ施ス所ナリ。政府ニ對シテ詐欺スル者。ハ皆自
 裁セシム。血ヲ以テ刑スルハ。日本ノ習慣ナリ。然
 レハ高僧王公ノ罪ヲ侵スハ。之ヲ豪スル。極テ緩ナ
 リ。則チ八丈島ニ追放スルナリ。是小島ナリ。周回
 僅カニ一時行程ノミ。江戸ノ東ニアリ。相距ル。一
 百四十里。斬巖兀立シテ。破泊スヘキ地ナシ。故ニ罪
 人ヲ送ルノ外。他船ノ来ル者ナシ。好晴ヲ見テ。僅
 カニ航スルノミ。危險言フ可ラス。其舟ヲ引拳ク
 ルノ状。猶大工ノ棟梁ヲ架シ。足場ヲ組ムカ如ク
 ニ。綱ヲ引テ。空中ニ登ラシムルナリ。此ノ如ク
 スルニ非サレハ。微風アルモ。舟岩礁ニ衝突シ。破
 裂スルナリ。此法ヲ設ケサルノ前。屢舟ヲ損傷セ

シ所ナリ

抑モ八丈島ハ岩礁多ク不毛ニノ種植ス一キ部地

ハ僅々ノミ桑樹アリ此島ニハ罪人多ク送テル

モ皆放免ノ念ヲ断テ僅カニ生命ヲ保持ス島ノ

各所ニ番所アリテ逃亡スル者ヲ監督ス天氣ヲ

候ヒ毎月番人ヲ交代セシム久シケレハ罪人ヨ

リ賄賂ヲ受クルノ恐アレハナリ食物租悪ニノ

少許ノ米樹根野菜等ノ食ス可テナル品ト不潔

水ナリ房屋僅カニ身ヲ容ルノミ冬日ノ沍寒夏

時ノ炎熱ヲ凌クニ適セス更ニ年々絹布ヲ納ム

ルヲ苦役トス之カ為ニ多ク桑樹ヲ植ユ以テ絹

布ヲ織成スルノ科ニ供ス

阿蘭使郎駿河ニ逗留スルヲ久シカラス此地ハ

往時舊日本將軍ノ居城ニテ後將軍ノ弟住セリ

然レ氏徳川ノ弟割腹セシ後ハ復タ之ニ住スル

人ナシ市中大ニ衰微セリ紳士多ク他地ニ轉移

ス堅城アリ規模宏大往時ヲ追想スルニ足ル

駿河ヲ出テ江尻ニ至レリ則チ回想スルニ三十

八年前ニヤコッパスベキス氏此驛ニ宿セシトア

リ是御所様ニ阿蘭人ニ日本貿易許可ヲ給ハリ

阿蘭使郎
駿河ニ往時
將軍ノ居城
ニテ

信長

使郎江尻

シテ謝スル為ノ使郎ナリ。終ニ江戸ニ至レリ。京
 都ニアル片馬十疋ヲ賜ハリ。且ツ所司代板倉播
 摩殿ノ添書ヲ持シテ。千六百十一年八月十日。上
 途セリ。昨日進行七里。草津ニ至ル。翌日土山ニ午
 餉シセスキユイノノニ宿シ。是ヨリ四日市ヨリ渡
 航シテ宮ニ至ル。日暮鳴海ニ着ス。此日炎熱灼ク
 カ如シ大ニ疲勞ヲ覺フ。次テ岡崎ヲ經テ吉田ニ
 至リ藤枝鞠子ヲ過キ日暮駿河ニ着セリ。

阿蘭使河ニ
 御使様御請

ニ氏ノ到着ヲ直チニ執政コセキユエシドノ及
 イコト庄三郎殿ニ報告シ。速カニ帝將軍ニ拝謁セン
 ンテ請フニ懇馬ノ答詞アリ。曰ク遠路ヲ經過シ
 来ル勞苦察スヘシ。帝將軍モ必ラス汝ノ到着ヲ満悦
 スヘシ。明朝速カニ帝將軍ニ奏スヘシトコセキユ
 エシドノ又曰ク明後日阿蘭使郎登城スヘシ。但
 シ謁見ニアラス。帝將軍ハ其代官役ニ就テ重大ノ精
 算ニ自ラ從事シ多務ナハナリ。
 駿河ニ着シ少時前ニ葡ボルチエガ使郎拝謁ノ時
 ノ所置振リヲ聞クヲ得タリ。此使郎先ツ口上演シ
 後ニ書面ヲユセキユエシドノニ捧ケリ。是執

政ノ長ナリ。其後御所様ニ拝謁ス。献上スル所ハ
金彩アル羅紗十枚。金盤一枚。時計臺アル者一個
ナリ。^{將軍}此諸品ヲ嘉納セリ。然レ臣^{將軍}帝自ラ一話ヲ
交ユルニアラヌ。使郎退去ヲ命セラル。頸ニ金鏈
ヲ纏ヒ。翻縁ノ天鵝絨ニテ。外貌ヲ裝飾スルニ係
ラサルナリ。<sup>警詢ノ語意不詳。按スルニ外貌裝飾
シテ。請ボスル所アルニ係ラス。待遇
簡易ナリシトノ意カ。</sup>

使郎述ル所ノ意ハ。日本人三年前ニ^馬麻甲^港ニテ人
ヲ殺セリ。敢テ其言譯ヲ請フ。又長崎ニテ^西西班牙^人
キア大船焼カレタル歎訴ナリ。此特蒙ムル所ノ

損害百萬ジユカレシナリ。就中之カ。為ニ我
蒙ムル所ノ損害最モ大ナリト。説ク所此ノ如ク
ナリシニ。コセキユエドノ答テ曰ク。舟子及軍
卒瑪港ニテ惡業ヲ為ス。豈ニ我政府ノ關リ知ル
所ナラシヤ。軍卒ハ租暴ナレハ。誰人ニ敵對スル
ヤ。謀ル可ラス。汝宜シク時ニ臨テ。處置スヘキナ
リ。

呂宋使郎大失敬ヲ為セリ。則チ先ツ江戸ニテ
幼將軍ニ謁シ。次ニ駿河老將軍ニ謁セリ。此時
一旗ヲ立テ。西班牙ノ記章ヲ表シ。銃手四十

人横柄ニ駁河ヲ過キ各街ニ於テ銃ヲ放チ喇叭
 ヲ吹き鼓ヲ鳴ラヌコキユエントノ進物ヲ返
 附ス使節將軍ニ請フ一四條ナリ曰ク呂宋人ニ
 日本適宜ノ地ニ於テ船ヲ造ルヲ許ス一其港ノ
 海岸ヲ測量スル一阿蘭ノ商船ヲ總テ禁スル一
 然ル中ハ西班牙王日本ニ船ヲ送り阿蘭ノ諸船
 ヲ討ツ一キ一呂宋人ノ商業ニ於テ日本監察ヲ
 附セス自在ニ賣買シ得ル一以上呂宋人先ツ口
 上ヲ以テシ後ニ筆記シタリ將軍ニ拝謁スル前
 ニ逗留スル一五日ナリ

スベキス氏及セーゲルスゾーシ氏殿中ニテ徘徊ス
 ル一ニ二時間ユセキユエンドノニ逢テ將軍拝謁ス
 ルニ故障アル所以ヲ聞ク彼朝スルニ他日ヲ以テス
 兩氏更ニ金銀及租税頭オ、ト庄三郎ニ接セリ此人
 ハ親切ニシテ能ク注意スル人ナリ一ニノカルモセーネ
 羅紗ゴロフクレンダマスステン硝子鑿カラペーシ藥角
 ヲ漆フ者ヲ呈セリオ、ト進物ヲ納レ使節ヲ周旋ス
 ヘキヲ約セリ且問テ曰ク合衆阿蘭國ハ如何シテ十
 二年間西班牙王ト戦ヘリヤ此時如何シテ勝ヲ得
 タルヤ阿蘭人ハ準備少ナクノ能ク呂宋船ヲ掠奪ス

ルヲ得タルヤト又コセキユエンドノニウナカラ
 サル進物ヲ呈シタルニ遠路旅行多事ナル一キ
 ニ此ノ如キ配慮ハ我ニ要ナシトテ返附セリ
 又西使ニ向テ曰ク將軍ニ請願セントスルハ何
 等ノ事件ナルヤ試ニ之ヲ述ヨ西使答テ曰ク阿蘭
 船日本ニ在留スルヲ得ンコトナリコセキユエ
 ドノ彼此大ニ使節ノ為ニ配慮シ曰ク余預メ之
 ヲ將軍ニ言上スヘシ必ラス意ヲ達シ得ルヲ疑
 勿ルヘシ尚拜謁ヲ俟テ使節自ラ之ヲ請求セハ
 完成スルニ至ルヘシト兩使更ニコセキユエ
 ドノニ懇請スルコトアリ則將軍ノ免許状ナリ是
 阿蘭船渡来シ日本港ニ於テ隨意ニ貿易スルヲ
 得ルヲ其荷物ヲ平戸ニ卸ス時ニ監察ヲ要セサ
 ルヲ將軍ノ意ニ應シテ一地方ヲ定メテ異國人
 在留スルコトコセキユエンドノ一々其理由ヲ問
 テ曰ク將軍之ヲ容ルコトアルヘシト後ニ一二合
 衆阿蘭國政度ニ向及フコトアリ次テ曰ク午後將
 軍ニ言上スヘシト相約シテ別レリ
 ウイルヘムアダムスハ使節ニ隨從シテ此時戶外ニ在
 リタルニ此人東印度商會ノ命スル所ニテ駿河

ニ返函スルナリ。呼戻サレ進物ヲ使節ニ返附セ
 シノントセリ抑モ日本人ハ異國人ノ進物ヲ一
 切受ケサルノ慣例ナルニアラス既ニ葡萄牙及
 ヒ呂宋使節ノ進物ヲ納レ且更ニ外國商人ヲ
 大ニ優遇スルナリ而シテ曰クスベキス氏セーゲ
 ルスソーニ氏ハ我カ親交好意ヲ疑ハサルヘ
 シ今進物ヲ多ク受クルモ受サルモ固ヨリ
 同一ナリ我カ此ノ如キ例ナシトウイルヘ
 ムアダムス氏之ヲ固拒シテ曰ク是豈進物ト
 称スルニ足ランヤ聊カ阿蘭國産ノ粗品ヲ呈シ
 親交ヲ得ルノ喜ヲ表スルノミ願クハ之ヲ容レ
 ヨコセキユエンドノ曰ク是常例ニ非サレ也今
 之ヲ嘉納スト終ニ全額ヲ収ム
 午後ヤ時スベキス氏及セーゲルスゾーニ氏ハ
 コセキユエンドノノ約ノ如ク^{將軍}帝ニ拝謁スル
 ヲ得各呈品ヲ各臺ニ載ス則チカラフ紅色及カ
 ルムニスネ羅紗、黒色滑ナル天鵝絨、カルムヒ
 ン紅色カルサイ、水浸カノロツラン、金彩アルサ
 ン、タマスト、ノールデンビユルグ、カルベツテ
 ン硝子罍、鉛致斤、長サハ尺ノ大炮、剛鍊二百斤カ

ラベーンニ挺各乘角象牙五本ナリ使節敬禮ノ
式ヲ行フ將軍我カ安全ヲ祝ス後同アリ曰ク阿蘭
人ハ何故ニ兵卒多勢ヲモリエシセ島ニ置クヤ
阿蘭人ハ波羅ニ貿易スルヤ此地ニハ上好
龍ヲ産ス是何レヨリ来ルヤ今言フ所ノ
アギエラ及カラムバハ何ノ邊ニ在ルヤ佳香ア
ルホハ阿蘭ニ生殖スルヤ何レカ尤モ高價ナル
ヤ

既ニ將軍帝ハ譯官ニ由テ使節ニ退去ス一キヲ命
セリ使節則チコセキエンドノ及庄三郎殿ニ
誘ハレテ室外ニ退出セリ是非常ノ優遇ニ出ル
所ナリ此ノ如キ懇親ハ屢三百ジエカトテ
捧クル所ノ日本大諸候ニ於テモ決シテ能ワサ
ル所ナリト云フ彼ノ葡萄及呂宋
ナリシヤ使節ノ如キハ將軍敢テ一言ヲモ賜フ
ナキナリ是ニ於テウイルヘムアダハス氏再ニ
呼及サレ將軍進物ノ謝辭ヲ述ヘ且ツ曰ク余阿蘭
人ノ商業ト戦争トニハ精熟ヲ悟ルト
スベキス氏及セীগエルズグーン氏日本文ニテ
書ヲコセキエンドノニ呈シ江戸ヨリ再来ス

二十一年八月十八日
途ニ就ケルニ
迅雷電光暴風ニ過
フ止ムヲ得ス

塩田

癩病人

此中尚注意ヲ求ム一キヲ請フ蓋シ江戸ノ幼帝將軍
 ヲ祝スルハ彼ノ注意ニ出ル所ナリ言罷ニカ来ナシ
 リア一シ使郎既ニ之ヲ行フ所ナリ則チ千慶六百
 十一年八月十八日途ニ就ケリコセキユエレド
 ノヨリ道中案内狀驛馬十疋人夫若干渡船場等
 江戸ニ至ルマテ公用旅行ノ報告ヲ賜フ兩使ハ
 途ニ就ケルニ迅雷電光暴風ニ過フ止ムヲ得ス
 江尾ニ一泊ス千六百四十九年十二月二十七日
 ナリ寒威凜冽ナリ翌日沖津ヲ過キ川ヲ涉リ由
 井驛ニ達ス山麓海岸ニ浴フ岩礁アリ尋常通路
 ハ岩礁ノ尖端ト其間隔ニ尺ノミ其下ハ狂濤怒
 蹄シ進歩極テ難シ塩田ヲ設クルト多シ日本
 式ニ據ル塩ヲ製出スルト多シ全國ノ用ニ供ス
 路傍彼此ニ村落アリ技ニテ構フノ茅屋アリ其
 内癩病人アリ極テ貧困ナリ梳ト籠トノ外一物
 ヲ有セス或ハ枕アリ卧用ニ供ス屋頭ニ鐘ヲ掛
 ケ旅人ノ通行スルヲ見テ之ヲ鳴ラシ錢ヲ乞フ
 餓餓ヲ告テ憐ヲ求ム然レモ村内ニ入ルヲ許サ
 ス是此病不治ニノ且傳染ノ恐ルアリトナリ故ニ
 此悲酸ス一キ景況ニ陥リタルナリ此癩病ハ東

方諸國ニテハ北方諸國ヨリハ劇シ一ロド千ユ
ス氏曰ク^{波新}シヤ人ハ癩病者ヲ常人ノ住居外
ニ追放ス蓋シ此人ハ太陽ニ對シ重罪ヲ犯シタ
ル不信心者ナリトスハナリ

由井ヨリ蒲原ヲ過キ富士川ヲ渉ル茲ニ富士山
ヲ見ル馬背ヨリ荷物ヲ卸シ小舟ニテ之ヲ運輸
ス為ニ多時ヲ費ヤシ日午吉原驛ニ達ス午食間
村人ノ話ス所ヲ聞クニ富士山ハ直峻ニシ他山
ニ異ナリ三十里外ヨリ望ミ見ル一シ終年雪ヲ
冒ムル山伏アリ年々登攀スルニ回通常同行三
千人山上ニ留止スル一十六日断食及諸難行苦
業ヲ修ム此ノ如クスル片ハ其人恐ル一キ魔神
ヲ見ル一ヲ得ルナリ之ヲ拜スル一食頃ナレ
ハ自他共ニ大ニ神聖ヲ得タリトス依テ山伏ノ
規則ニ據リ頸ニ白色ノ袈裟ヲ掛ケ黑色ノ小帽
ヲ前額ニ置クヲ得此山伏ハ日本全國ヲ巡廻シ
己ノ信スル所ノ神ヲ祈念ス小銅盤ヲ携ヒ之ヲ
鳴ラシ其来ルヲ報ス頭髮ハ^{縮末}縮ス之ヲ信スル
人ハ彼ヲシテ貨賤ノ紛失或ハ隱匿スルヤヲト
セシム

之ヲ行フ式左ノ如シ。一童子ヲ地上ニ坐セシム
 ル。東方風俗ノ如ク。是ニ於テ魔ヲ呼テ童子
 ノ魂魄ヲ轉換セシム。既ニノ童子口ヨリ泡沫ヲ
 噴キ眼ヲ旋轉回三身ヲ轉スルニ至レハ山伏童子ニ向
 テ紛失品ノ所在ヲ詰問ス。童子則テ何ノ所ニ於
 テ何ノ人何ノ日時ニ隱匿スルヲ明言スルナリ。
 山伏ノ外別ニ町村ヲ通過スル山坊主ナル者ア
 リ。是他ノ病苦ヲ加持スル者ナリ。則テ晝夜病床
 ニ侍シ。祈念讀經ス。其文意解ス可ラス。諸神ニ向
 テ世上通用字ニ異ナル異形ノ字ヲ書シ以テ之
 ヲ批上ニ排列ス。ヘンリキハীগエナル氏ハ自
 ラ各様ノ山坊主ヲ見タリ。其頸ニ白珠ヲ貫クノ
 長索ヲ掛ケ眼ヲ旋轉シテ見サルカ如クシ。可恐
 容貌ナリ。

ハীগエナルス。曾テ一日占法ヲ修スル山伏ヲ
 招キタルニ。彼尋常式ノ如ク久時誦經シテ。後答
 フ。彼及ヒ傍人ニモ誰氏アルヲ見ルニアラス。汝
 何故ニ敢テ余ヲ苦責スルヤ。余汝ノ余ヲ苦責ス
 ル所以ヲ解セス。然レモ汝ニ歎スル一人。余ニ詰
 ルアリ。汝ヲ責ムヘシト。是ニテ満足セリ。余今去

ル一シト

山伏ノ説ク所其教徒中一種ノ語ヲ用フ尋常凡人ノ悟ラサル所ナリ太古ノセルケドロイデ
ルス氏ヨリ出ルナル一シ是ゴツテンノ徒ナリ
則チスカヒトスウエーデンノールウエーゲン
及スコトネシハ往時之ヲ知レリヨリ生シ其領
地 タウナミスヨリ **平** **泥** **日** **土** **ト** ニマテ侵入シ是ニ

於テ王ヘツシスヲ殺セリ勝ニ乘シテ更ニ上部

亜細亞ニ進メリセーリユスダリウスセルセス

有名ナル **波** **斯** **テ** **ア** 更ニゴローテン **山** **王** **サ** **ン**

ドルヲモ服従セシメリ次テ印エ及支那ニ蔓延

セリドロイデニス氏ハゴーテンノ宣教者ナリ

故ニインジアーンセブラマネスセルケドレ

ーデルス及日本僧トノ間ニ大ニ相同シキ所ア

ルナリ希臘記者ジオケネスラエルナウス氏曰

クインジセゲームノソビスントドロイデルス

氏トハ曖昧ニシテ深奥ナル諭言ヲ全世界ノ學

者ニ講究セシメリ曰ク人ハ神ヲ尊敬セサル可

ラス決シテ惡事ヲ行フ勿ル一シ勇氣ヲ養フ

一シトポトポニウスノラハ殊ニドロイデルス

トラスノ法主トス
トラスノ法主トス
トラスノ法主トス

氏ヲ證トス。其生徒ノミニ秘奥ヲ示ス。故ニ凡人ハ唯之ヲ誦シテ。靈魂不死ヲ知ルノミ。此沉默ハ。嚴ニ誓約スル所ナリセルデニウス氏誓文ヲ記スル。左ノ如シ。ドロイス氏ハ其生徒ニ約シテ曰ク。余汝ニ誓フ。此日月星辰及周圍萬物ヲ以テ保証トス。汝此事ヲ不學不信ノ徒ニ輕ク説示スル。勿ルヘシ。唯師恩ヲ顧念シテ。敢テ之ヲ辱カシタル。勿レ。神ハ沉默ヲ主トス。トアラシキユスサヘリウス氏ハ之ヲ排毀ス。何トナレハ印出ニアル一少羊ブラノネル氏サヘリウス氏曰ク。余兩人ノミナル中。余秘事ヲ解セリ。是其教師前以テ彼ニ約スル所ニテ。彼亦決シテ此秘事ヲ復言セシニアラサレハナリ。又イリウスカールノ説ニテハ。トリユイデスニ於テ保持スル教法ハ外國ノ韻ヲ教フル。極テ多數ナリ。之カ爲ニ殆ント二十年ヲ費ヤスヲ要ス。而ノ之ヲ筆記スルヲ許サス。止ムヲ得サレハ希臘文ヲ以テス。而ノ日本山伏モ其教徒通用スル一種ノ異語ヲ用フ。常人ノ関カ知ルヘキニアラス。猶往古ドレーデスノ如シ。獨ニ語ノ外教法及理學上ニ

於テリユニユセ語ヲ用フ是亦大ニ獨逸語ニ異ナリ

日本ノ山伏ハ群ヲ為シテ諸所ヲ徘徊スルアリ之ヲハルボリボンシト名ク路上彼此ニテ阿

蘭使節ニ隨行シ施物ヲ請フ此ノ如ク為サハル

片ハ山林ニ入ル洞窟ニ住スルハ恰モ地下ノ昆

夷ノ匍匐スルカ如シ人之ニ對スレハ驚ク一キ

人ナリ其帽コロイセリングハ樹皮ヲ以テ編ミ

製ス帽尖ノ鏝リニハ黑色ノ馬毛或ハ野牛毛或

ハ長キ鳥羽ヲ附ス腹ニ堅キ眞アル帶ヲ纏フ上

衣ハ木綿製ナリ半臂ニ及ヒ肘ニ達セス下衣ハ

野牛皮ニテ製ス食器ニハ組紐ヲ繫テ帶ニ結フ

左手ニハ太キ遊歩杖ヲ執ル野生ノスータンダ

木ニテ製ス此木ハ實ヲ結フ歐洲ノミスプレ

ニ異ナラス履ハ紐ニテ跗上ニ固繫ス四枚ノ大

ニノ廣キ鍔齒アリ恰モ石道ヲ過クル馬鍔蹄ノ

如シ頭髮頰鬚叢生シ紛亂錯綜シ空テ肩ヲ蓋ヒ

胸ノ半ニ至ル其容貌怪獸ニ似タリ三十歳ニ至

テ始テ魔ヲ驅ルノ人トナル

使節又別ニ占者ゲレギウスニ逢フ此人ハ幻術

フシラヌト云々
と聴ク

ヲ修メ盗賊ヲ知ル得ルノ術アリ。常ニ山頂小舎ニ住ス其面貌正視スヘカラス。蓋シ平日暑寒風雨霜霰雪ニ曝露スレハナリ同黨ノ女ヲ娶リ婚ヲ結フ。

口デウエーキフロシウス氏寛永五十六年二月二十六日京都ニテ遇フ所ノ占者ノ事ヲ記シ。看官ヲシテ其状ヲ領知セシム。此ゲンギウスハ頭ニ一角ヲ生ス。魔曾テ彼ヲ誘テ某山ノ頂上ニ攀登セシム。定時間茲ニ角止ス。既ニノ魔ノ至ルアリ。或ハ日午ニ於テスレヒ多クハ日暮ニアリ。ゲンギウス輩ノ集會スル所ニ現ス。或ハ誘テ不可測ノ深谷ニ入ル。此時僅カニ之ヲ拒ム者アレハ則チ之ヲ殺ス。一老人アリ大ニ魔ヲ信ス。其子之ヲ信セサルヲ以テ魔ヲ逐フテ山上ニ至ル。能ワス。路上偶一少年ニ逢フ。共ニ進テ山頂ニ至ラントシタルニ。忽チ地獄ニ陥リタリ。魔ハ一貴人ノ状ヲ現ス。老人之ヲ尊敬スルニ。其子ハ弓ヲ引テ魔ヲ射ントシタルニ。其是貴人ニアラス。一狐ヲ射タリ。少年ハ傷獸ノ血痕ヲ逐テ峻山上ニ至レリ。其嶺端ニ立ツニ。脚下ニハ無数ノ骨骸ヲ

本論の術
学てんや

元

見ル。蓋シ共ニ魔ニ誘ハレタルゲンギウスノ遺骨ナリト。

然レ氏今言フ所ノ驅魔人占者及ヒ盜賊ヲ察スル人ハ日本山坊主ハルボルボンシト。則テゲンギウスノ所業ナリ日本人ハ此術ヲ數百年來學ヒ知ル所ニテ其源ハ亞細亞他方ヨリ海ヲ超テ來ル所ナリ。蓋シ古トハ二千年以外ニ於テ全東方ニ大ニ流行シ而ノ各様ノ別アリ。又其術ヲ施行スルニ各様ノ器械ヲ以テス。水硝子鏡油輪火小兒妊婦鳥等ナリ。

一盃

圓錐

最モ尋常ハ事ノ將來ノ吉凶成否ヲ知ラントシ又紛失品ヲ探索スルニアリ。此時一盃ニ水ヲ盈テ之ヲ別徴アル金銀版及寶石ヲ投シ。此盃ニ向テ咒文ヲ唱ヒ魔ヲ呼フナリ。預備既ニ終ル則テ水ヲ見テ決テ取リ以テ問題ニ答フルナリ。

又占者圓錐ニ鮮明液ヲ滿テ周圍ニ蠟燭ヲ點シ喃喃咒詔魔ヲ招ク。既ニ其索ムル所以ヲ問フ。且默シテ小兒或ハ妊婦ヲ錘ニ向ハシメ而メ水ヲ靜視ス。硝子錘ニ映スルノ小兒或ハ妊婦ノ像ヲ視テ後問題ニ答フ。

又鏡ヲ用フル方アリ。此時喃々咒文ヲ唱ヒ言フ

トアルニ似タリカイサルシジウスユリアニユ

ス。此類ノ鏡ヲ用ヒ所願ヲ映視ス。

パウサニアスハ希臘記者アリ一井ヲ以テセレ

ス神ノ殿堂ナリトス。此井中ニ細キ紐ニテ鏡ヲ

繫キ沉ノ重病ナル人ヲシテ自ラ之ヲ注視セシ

ムルニ其鏡面屍ヲ見ルハ事成ラス健康人ヲ見

ルハ回復スルノ徴トス。

又油ト煉トテ用フル方アリ其ニ品ヲ調和シ不

穢ノ少年未夕淫情發動セサノ瓜上ニテ燒クナ

リ。既ニノ日光ニ映シテ瓜上ノ燒痕現狀ヲ見テ

以テ吉凶ヲトスルナリ。

又古者金環ヲ指間ニ掛ケ之ヲ水中ニ入テ旋廻

シ其運動ノ狀ニ由テ事ノ成否ヲトスルアリ。

又靜定水中ニ三個ノ石ヲ投シ三輪相重疊スル

ノ狀ヲ見テ事ヲトスルアリ。

ハルロ氏ハ羅旬語ヲ通知スル人ナリ一少年ヲ

シテ水中ニテ十五詩句ヲ誦セシノ以テ中羅瑪

トミトリダテストノ間ニ起ル一キ長軍ノ初中

終ノ景況ヲ前知セリ。

ラコーンセ市エビタミユスニ接シテユノ沼澤アリ之ニ麵包ヲ投シテ以テ吉凶ヲ卜ス其保

又重折スル布巾ヲ頭上ニ置キ更ニ滿壺ノ水ヲ載ス而シテ呪文ヲ唱フルニ其水熱沸スルハ吉寒

盗賊ヲ探知スルニハ日本僧山伏ゲンギウス各

種ノ幻術ヲ行フ是二千年前ヨリ亞細亞ニ流行スル所ナリ斧ヲ臺上ニ置キ呪文ヲ唱ヘテ一々

ハ巡回シ或ハ震揺スルナリ

節ヲ用フルモ亦相似タリ劃刻アリ之ヲ指間ニ挟ミ呪文ヲ唱フドウウイマドウウイマエシチ

又驢馬頭ヲ炭上ニ置キ呪文ヲ誦シテ之ヲ燒ク

ノ一法アリ古者之ヲ食スルニ美味ナレハ一廣

地ニ於テ其炭碎片ヲ撒ス各々字形ヲ現ス後久

時禁食シタル鶏ヲ放テ其啣ハ所ノ炭片ヲ集メ

寄テ語ヲ為セハ盜ノ果ノ誰タルヤヲ判決スル

ニ足ルナリ。

又更ニ奇異ナルハ人頭ヲ火中ニ投スルナリ。又薰物ノ香臭鳥ノ飛狀啼邑狼吠犬聲蜂飛又氣中ノ及響員致計弄鬪取占夢幽靈遊魂觀掌返光星遊星等ニ由テ事ヲ判スルアリ。

奮希臘人ハ皆波斯ノソロアステル氏ヲ以テ此幻術ノ鼻祖トセリ然レモセルシユスヲ尊

信スルオスタネス氏以後ハ政羅巴ニテハソ

アステルヲ排棄セリ。ニシイルスアボルロニ

カカヒチデネス及ダニエスハ多クハデモ

クリテスヲ主張ス先哲ノ語ニ曰クアシリール

スカルデーニベルセル及東方ニテハ支那及韃

鞏ヲ占者ノ始祖トス是ヲ以テ考フレハ日本ニ

テハ未タ釋教ヲ奉セサル前ニ於テ既ニ

此法アリタルニ一時衰微シ後再ヒ歐羅巴ヨリ

原地ニ再入シタルヲ疑フニ足ラス

阿蘭使郎アリシウス氏及ブルトクホルスト氏

ハ午食シ一身快活トナリ且日本山伏ノ高峻

ニノ終年雪ヲ冒ムル富山ニ攀ルノ珍話ヲ聞テ

意氣爽快トナル吉原驛ヨリ砂道ヲ過テ原驛ニ

至レリ常道ハ粗砂多キヲ以テ別路ヲ取り海岸
ニ沿テ沼津ニ至リ進テ箱根ノ麓ナル三島驛ニ
至ル三島ニ至ルマテハ道路平坦両側樹木多シ
三島驛ハハケ月前ニ焚焼セルヲ以テ全街皆新
築ナリ一泊ス

翌朝更ニ教馬ヲ雇フテ阿蘭人及日本人之二跨
リ箱根ニ赴ケリ此馬勇壯ニシテ此險路ニ慣ル教
村ヲ經難路ヲ過テ箱根驛ニ達ス驛ハ山間ニア
リ四望皆山ナリ湖水アリ舟ヲ泛フヘシ但シ魚
ナシ此水深キ一七十尋八十尋又九十尋或ハ百尋ニ及
フ所アリ

午食後驛外ノ關門ヲ過ク建築堅固ナリ貴族ニ
非サルヨリハ乘馬乘輿通過スルヲ許サズ門ノ
両側ニ番所アリ内ニ四角ノ室アリ適宜ノ臥室
アリ壁ニハ鳥銃弓矢及劍鎗ヲ排列シ番卒ハ地
上ニ坐ス

驛ヲ出ル遠カラスノ水瀕ニ三寺^堂アリ旅人之ニ
請シ二三ノ札ヲ投スルニ其札直チニ水中ノ石
間ニ出ツ此ノ如キ夢^{ニ似タル}如キ慰ニ由テ其朋友ノ
靈魂自在ニ此水ヲ飲ムヲ得ルト謂フナリ

通例靈魂ヲ祭ルハ八月ニ於テ二日間之ヲ修ス
其式尤ノ如シ夜中各様ノ画彩アル燈ヲ檐頭ニ掲
ケ市中或ハ野外ニ出ツ蓋シ信心者アリ又遊觀
者アリ暗ニ乘シテ外出シ迷遊セル靈魂ヲ迎フ
適好ノ地ニ至テ敢テ有形物ヲ見ルニ非サルモ
之ニ逢フト假想シ之ニ向テ告テ曰ク善ク来レ
リ善ク来レリ余待ツト既ニ久シ請フ休憩セヨ
ト則チ為ニ食物ヲ供ス又曰ク遠路来着疲勞察
スヘシト米果實及他ノ食品ヲ地上ニ排列ス然
レモ温湯ヲ供スルトナシ此ノ如クスルト一時
頃ニノ則チ食シ終ルト為シ延テ我家ニ誘ヒ之
ヲ清室ニ請シ盛膳ヲ供ス此ノ如クニノ既ニ二日
ヲ經レハ街上炬火ヲ焚キ靈魂暗夜帰路ニ迷フ
ヲ照ラスナリ此ノ如クニノ衆人皆歸家スル中
家脊ニ瓦石ヲ投シ靈魂ノ遺存隱匿ヲ防クナリ
何トナレハ靈魂逗留スルト二日以上ニ亘ルト
アレハ復ヒ極樂ニ赴クナキノ機會ヲ失シ地獄
ニ至ル可ケレハナリ今炬火ヲ焚クト盛ナレハ
風雨アルモ路ニ迷ヒ歩ヲ失スルト勿ラシムル
為ナリ

使節ヒリヒウス氏及ブルークホルスト氏ハ箱
 根關門ヲ出ルニ久シカラスノ險路ニ臨ノリ既
 ニノ其巔ニ至ルニ屢危キヲ經タリ此道ハ岩石
 ニノ其幅二尺ニ過キサル狹窄ノ所アリ一側ハ
 峻山天ヲ衝テ高ク軟ク一方ハ深谷測ル可ラス
 一歩ヲ失スレハ墮落ヲ免カレス不幸ニノヒリ
 シウス氏ノ一僕歩ヲ失シ路外ニ倒レリ然レハ
 馬ノ手綱ヲ握リ之ヲ攀テ僅カニ本道ニ至ルヲ
 得タリ日暮小田原ニ達ス此地ハ美街ナリ側ニ
 城アリ周囲石ニテ築ク塔塔高ク聳ユ日本人ノ小
 田原ニテ話スヲ聞クニ此地數年前大地震アリ
 テ彼此ノ地最モ震動劇甚ナリシ人家塔寺及全
 城ヲ顛覆セリ地上恐ルヘキ穴ヲ穿テリ然レハ
 汚泥湧出シテ忽チ此穴ヲ塞ケリ今日ノ人家此
 汚泥上ニ築ク所アリ
 然レハ此ノ如キ地震ハ日本ニテハ敢テ珍事ニ
 アラス或ハ全市全國顛覆スルヲアリ又沉没ス
 ルヲアリ箱根驛モ往時ハ立派ナル市街ナリシ
 ニ數時間ニ埋没シ人畜家屋共ニ烏有ニ歸セリ
 蓋今日阿蘭使節ノ通過セシ無限ノ深谷ハ則チ此

大地震ノ遺跡ナリト

日本人ハ地震ノ原因ヲ説クニ衆論紛々タリ尋

常世人ノ信スル所ハ妄談ノミ曰ク海中ニ一大

魚アリ其尾ヲ奮テ岸ヲ打ツ其力猛劇ナリト

往時希及羅甸ノ理學家此地震ノ原因ヲ

説ク亦諸家一ナラス是人智蒙昧ニノ地震ノ真

理ヲ悟ラサルニ因ル

余今ブラット氏及セネム氏ノ二説ヲ掲ク一シ甲

氏曰ク「アルテニセルスノ舊説ヲ守ル」恐ルヘ

キノ地震ト水ノ晝夜流去ニ由リ今日尚地中海

ニ於ケルカ如ク汝ノ祖先埋没セリ而ノアトラ

ス島ハ大海中ニ其頭ヲ没セリト乙氏曰ク全國

ハ破裂スルナリ故ニ海ヲ隔テ陸地アリ西班牙

ト亞弗利加トヲ海ニテ分チ急西里以太利

トヲ割キ田畝モ地震ノ為ニ沉没消滅セリ地中

ニ密鎖スルノ風氣迸去セント破破裂セントス

ル井為ニ諸方ニ衝突スルナリ此ノ衝突ニ當ル所

則チ震動甚クシク其上ニ建築スル百物顛覆ス

ルニ至ル或ハ曰クオウサ及オリヒユス山ハ原

素固着シタルニ地震ニテ分割セルナリ一リニ

ウス氏之ニ添テ曰ク最高ナルシボチユス山ハキ
ユリテ市ト共ニ又マクネシアニ於ケルシビリ
ユム及タンタリスブーニシアニ於ケルガラニ
ス及ガマレスモーレンランドニ於ケルベギウ
ムムオチス湖ニ浴フビルラ及アンケサコリン
チセ海灣ニ於ケルエリセ及ビエラハ何ニ由テ
埋没セシヤエリセ及ビエラヲ詩人オヒジウス
氏詠スル所アリ今羅甸支ヲ阿蘭語ニ譯スレハ
左ノ如シ

汝アカイア及エリセーン及ビエラノ何レノ

象ニ在ルヤヲ探索セハ波浪上水中ニ之ヲ見
出スヘシ舟子ハ穏静ナル風ニ慣ル造化ハ人
民及家屋顛覆スルノ動搖ニ慣ル

バウサニアス氏曰クエリセ及ビエラハ
サシデルデゴロト降誕前三十七年ニ沉没セ
ルナリ

亞歷山王

又地震ノ原因ヲ説ク諸家一ナラスデモクリチ
ユス氏謂ク雨水地下ノ凹所ニ沉ミ土ヲ膨脹セ
シム其沸騰スル片地面ヲ擡起スルナリトタレ
スミレシウス氏曰ク土ヲ水上ニ投ケ上ケ此時

兼テ波浪ヲ震揺スルナリト然レ正シキ理學
家ノ説ニテハ地震ハ地下空所ニ閉鎖スル風氣ニ
起ルトス其漏孔閉塞スルヲアレハ風氣漏洩スル
ノ路ヲ索ム抑モ其始土中ノ小孔ヨリ吸収シ深
ク侵入スル所ナルニ今出ルニ由ナク土ノ自ラ
乾燥スルニ由ルカ或ハ雨水ニテ湿润スルニ由
テ多量ノ蒸氣ヲ發ス蓋シ地下ノ温熱及地上ノ
日熱大ニ之ニ關係スルナリト

此説ハアリストテレス氏致條ノ理由ヲ以テ保
証スル所ナリ凡ソ劇甚ナル地震ハ穩和ナル天
氣ニシテ地下ノ風凹所ニ閉鎖スル中ニアルナ
リ就中秋及春ニ於テ多風ノ時ニアリ風強起ス
レハ地震則チ止ムナリ山谷多キ地ニ地震多キ
ナリ以テ原文缺損可惜

地震ノ種類ヲ説クニ亦諸家一ナラス或ハ三種
ト為スアリ或ハ七種ナリト為スアリ其三種ノ
別ハ一震動是恰モ舟ノ震揺スルカ如シ地面
彼此ニ動揺シテ家屋ヲ倒スニ至ルナリニ衝突
是地面ヲ上下腫スルナリ則チ閉鎖スル所ノ地
下ノ風道ヲ上邊ニ求ムルニ出ル所ナリ三地上

ニ孔ヲ開キ地面破裂シ上面ノ地ハ。沉没スルナ
リト。然レモ ^{歴山王} サンドルデゴロ。ヲニ属ス
ル世界紀事中ニハ。此三種ノ外更ニ四種ノ地震
ヲ弄ス。曰ク相互ニ衝突スルノ震揺破裂地下鳴
動急速顛覆是ナリ。

地震函連スルノ長短ハ之ヲ歴驗スル所ニ據ル
ニ或ハ间歇シテ震揺スルアリ或ハ休歇ナクシ
テ函連四十日ニ及フアリ是因鎖スル所ノ氣ト
地上ノ氣ト厚薄稀稠平均ヲ得ントスルニ由ル
所ニテ風ノ多ク輕重ニ關係スルナリ。

地震ノ前表各種ナリ其近接スルニ方テハ空氣
非常ニ靜謐トナル蓋シ風ノ原素地上ヨリ来ラ
ス地中ニ潜伏スルニ由ルナリ又直算シテ稀薄
白色ナル雲片ヲ現ス多クハ朗晴ノ日日没ノ後
ニアリ天上風ナク蒸氣アリテ結テ雲トナリ雲
片氣中ニ游泳スルアリ海水潮時ナラサルニ俄
カニ高潮トナリ井泉ヨリ臭氣アル塩水ヲ出ス
等ナリプリニウ氏曰ク之ヲシデス氏ハ希臘
ノ博士ナリ曾テ井水ヲ汲ム片大地震アリテ其
市ノ沉没スヘキヲ預察シ之ヲラセデモニール

地震摘要

二告ケタリ。又地下ノ昆蟲能ク預メ地震ヲ前
 知シ群ヲ為シテ速カニ遁亡スルヲアリ。又雲之
 蔽ヲニ非スノ太陽光ヲ失シ曇暗トナルヲア
 地震ノ為ニ被ムルノ損害人ヲシテ驚駭^冷戰栗セ
 シム其家屋村落市街或ハ全城埋没シテ墓地ト
 ナルヲ見ハ誰カ支レ恐懼セサランヤ或ハ海中
 忽チ島嶼ヲ顯出シ或ハ山ヲ移シ或ハ陸地水ニ
 固マレ或ハ島嶼陸地ニ接着シ或ハ地上ノ孔ヲ
 リ火ヲ噴キ硫黄ヲ吐キ灰ヲ飛シ砂土數里外ニ
 飛散シ海ヲ超テ田畠ヲ埋メ川脉ヲ壞シ又震後
 腐敗風ノ為ニ惡病流行スルヲアリ是敗氣ノ空
 氣ヲ毒スルニ由ル此ノ如キ悲酸ハ日本人屢之
 ヲ嘗ムル所ナリ
 日本ノ不幸ヲ活潑ニ映鏡視セシムル為ニ今ニ
 回々大地震ノ狀ヲ記スヘシ其一ハ大畧百五十
 年前ボノニールニ於テスル者一ハ近年イェリ
 ソールニ於テスル者ナリ學士ヒリッブスベロ
 アルシユス氏千九百零五年ボノニールニ在留
 セリ十月ノ季一夜十一時非常鳴動シテ恐ルヘ

大ニシ地震

ク地震スボノニシテ衆人皆驚起ス忽チ見ル彼
 此ノ烟突壁土顛倒スルヲ然レモ地面ニハ異ナ
 ル所ナシ但シ三日後朝九時ト十時トノ間ニ於
 テ再ヒ震動シ百物戸ニ衝當ス地下旋回シ地上
 震揺ス大小ノ家屋頽頽シ日暮再ヒ震動スブリ
 シスベシテホリノ邸ハ破壊スヤコブミートル
 及フラシシスキユムニ属スル寺院ハ側壁ニ大
 隙孔ヲ開ケリ塔ハ多クハ倒ル烟突存スル者ナ
 シ既ニノ漸次ニ震揺減少ス然レモ連夜微動ア
 リ故ニ夥多ノ人員皆天幕ヲ張テ露宿スル一
 月許此時又熱病ニ罹ル者多シ第二震後十五日
 ニ又第三震アリ共ニ夜間ニ於テシ二十四日ノ
 後僅カニ休止セリ其災害言フ所ヲ知ラス又ベ
 ロアルジユス氏曰クヒユルキユスアルグラシ
 チス氏此地震ノ為ニ醜容トナリタルハ實ニ驚
 ク堪ヘタリ蓋シ屋倒レタルヲ以テ窓ヨリ匍匐
 シ出ントスル時壓扁セラレカト云フ自ラ勇ヲ奮
 テ喉ヲ損傷セルナリ

又近年ラゴウサニ於テ大震アリタリ千六百六
 十七年四月六日天氣快晴穏和ナリ朝九時ト十

永六十年

時トノ間ニ於テ卒然トシ一瞬間ニ全市大震ス
ヨリスフローク氏ヲゴウサ某屋ノ上層ニ住セ
リ其顛覆スルニ方テヤ氏及妻アレジカン貴女
小児侍婢共ニ壓扁セラレヨゴブハンダム氏ハ
阿蘭高會ヲ宰シテシムルナニ宿セリ然レ氏下
層ニ在リ此人他人ト共ニ石階下ニ潜ミ僅カニ
半身ヲ室ヨリ出サントスルニ方テ三層倒レリ
暗黒トナルト雷鳴トニテ為ス所ヲ知ラス電光
ニ乘シテ別室ニ入ル是クローク氏住スルノ房
ナリ大色ニ叫喚ス而ルニ他^別人ノ人ヲ呼フカ如
キヲ聞ク然レ氏其誰タルヤヲ悟ルトナシ故ニ
天明ヲ待テ破屋ニ在リ大渴堪可テス蓋シ暴風
ノ為ニ崩壊スル所ノ壁土飛散旋回スレハナリ
依テ他ニ出ツ然レ氏亦危険ナキニアラス何ト
ナレハ上ヨリハ大土塊ヲ墮落シ又地面ハ各所
破裂シタルアリ又新タニ裂クルアレハナリ全
市忽チ百地獄トナルニ似タリ則チ六人ヲ伴フ
テ壞屋ヲ起ヘ大ニ辛苦シテラゴウサ外ニ出タ
リ途中ニテ同伴ノ一人壓死セリ但シ市外ニ出
ルモ亦頗ル困苦ナリ岩石ノ大碎片途上ニ及畝

上ニアリテ。運歩ニ便ナラス。回顧スレハ市中各
所火ヲ失シ。鮮焔中ニ在リ。又三個ノ火藥庫ノ今
方將ニ破裂ス。一キヲ配慮ス。若シ破裂セハ遺存ス
ルノ家屋悉ク粉碎ス。一ケレハナリ。而ノ地震。及
雷鳴尚止マス。屋外ニ在ル人ハ露天ニ在テ。日夜
飲食ヲ絶シタリ。健康ノ者ウナク。多クハ疲勞^億悲^誠
傷^湯スルノミ幸ニソ^勿茶^粥ヲ舟士港ニ在リ。一二
ノ蒸餅ヲ恵施セリ。以^僅テ^カ餓ヲ凌クヲ得タリ。此舟
子亦大危難ニ遇ヘリ。則チ海水退去スル。一三回
ニノ其港終^邊ニ乾涸シ。船ハ破碎シテ地^海ニ没シ
震搖甚タシ。既ニノ海水忽チ故ニ復シ。数千ノ船
船一時ニ海岸ニ衝突シタリ。苦痛ト餓餓トノ為
ニ斃ル者頗ル多シ。又或ハ傾キタル柱梁ニ撞^破マ
リ。壊レタル壁ニ壓サレ。大金ヲ擲ツニ非サレハ
他人顧テ之ヲ援フニ暇アラス。フハンダムハ船
内ニ在リタルニ。大ニ危難ニ遇ヘリ。但シ近傍ニ
アル火藥庫破裂シタレハナリ。四月八日。三百人
ノト^土耳^其コ人及モールラツケニ。馬及騾ニ乘テ。ラ
ゴウサニ来リタリ。郭門ニ於テ一二之ヲ支障ス
ル者アルヲ見テ。則チ劍及銃ヲ以テ道ヲ開キ進

入ス婦人ハ走テ港ニ向ヘ男子ハ殺サレ盜賊横
 行シ乱妨頗ル甚クシ第六日ニ至テ地震稍穏静
 トナル是ニ於テフハンダム氏ハ自ラ市ニ入り
 倉庫ヲ檢セントセリ然ルニ更ニ悲歎スヘキ
 アリ何トナレハ地震ハ稍緩トナリタレト尚
 タ止マス火勢減セス市中盜賊横行シ路上屍体
 充滿シ或ハ血中ニ没スルアリ或ハ半焼スルア
 リ臭氣鼻ヲ撲ツフハンダム氏則チ衆人ヲ使役
 シ貨財ヲ瓦礫中ヨリ掘リ出シ約スルニ一半ヲ
 共フルヲ以テシタルニ多人骨カスル一ニ日ニ
 及ヒタレト瓦礫影シキカ故ニ得ル所甚ク少ナ
 ク骨カヲ償フニ足ラス依テ此事ヲ止ノリ抑モ
 全市六千人中生ヲ存スル者僅カニ五百人ニ過
 キス而ノ千六百人ハ焼死セルナリ
 阿蘭使節ヲ見シウス氏及ブルークホルスト氏
 舟ヒ日本旅行ニ説キ及フヘシ小田原ニ一泊シ
 舊城沈没ノ痕新城建築ノ状ヲ一見シ十二月三
 十日數條ノ川ヲ經テ一ドヲ過テ大磯ニ至リ馬
 入川及相模川ヲ見ル共ニ舟渡シナリ平塚馬入
 田村及藤澤ヲ過ク

此途上大寺トランカ堂ノ外見ル一キ者ナシ上
 層ノ屋脊ノ四方ニ卧牛ヲ置ク牛身裂光ヲ放ツ
 蓋シ鍍金セルナリ屋脊ノ四方ニ張り出ス一壁
 外各六尺構造ノ全体四角ナリ各面ニ四大柱ヲ
 建ツ日本勇將ヲ画ク其事業ヲ歌曲ニ製シ途上
 ニモ屋内ニモ之ヲ唱テ施物ヲ求ム摺戸ノ上ニ
 ハ半ハ窓ヲ開ク上邊ハ低レ下リタル屋脊ノ下
 ニアリ下邊ハ摺戸ノ上ニアリ四方ハ白壁ニテ
 塗ル外面ハ四方壁ニテ囲ム石ニテ畳ム上邊ハ
 斜ナル護胸壁トナル内壁ハ平滑ニ塗幔ス其傍
 ニ主僧ノ宅アリ屋脊ノ尖端ハ塔ノ如シ堂上ニ
 聳ユ

此堂内ニ安置スル佛像ヲトランカト名ク是致
 百年前ニ於テ支那帝ヒアオヒユス氏此彼半島ナ
 ル高麗ヲ服従セシメシノニカ為ニ衆兵高麗ノ首府
 ピングヤニクヲ圍ミタル片ニ大ニ之ヲ防拒ス
 ルニ盡カセシ人ナリ其後又韃靼人ノ為ニ高麗大
 ニ困苦セシ片ニモ又朱ノ零落ニ就テモ大ニ國
 事ニ功勞アリシ人ナリ朱ハ高麗人日本人又支
 那人ノ家具ヲ塗ル所ナリ日本ト高麗ト多年ノ

戦争ノ後トランガハ日本人取テ以テ軍神ト為
 ス所ナリ。此時トランガ高麗ノ為ニ用ヲ為サス
 故ニ日本ニ舟送セリ。高麗全國争亂止マヌ。暴人
 横行シテ百物兵火ニ罹レリ。トランガ亦此災ヲ
 免カレス。是ニ於テ高麗全國ヨリ加勢ヲ招集ス。
 當時之ヲレアオケユングト名ク。各地ヨリ人員
 ヲ送レリ。キンキ道ニ首府ビングヤングアリ。最
 モ先ツ多勢ヲ舟送シテ日本兵ヲ衝カシム。他ノ
 七道ホアンシアキアキギエエンシウエンロ
 キンクサンカンゴイングカオキウリ及ビンガ
 ン亦多勢ヲ募ルトランガノ為ニ力ヲ盡ス。終ニ
 日本人ニ向テ戦フ。此時トランガ將軍タリ以テ
 日本ノ猛將八人及其加勢ヲ討ツ。故ニ其像ニ八
 臂アリ。手中コノツ先太ノ棒。剣。大鉞。刀。槌。弓。鎗。杵
 ヲ執ル。而ノ敵ニ對立ス。敵ハ左手ニ斧ヲ執リ。將
 ニ打ントスルノ状ヲ為シ。左足ニテ銅製ノ噴火
 蛇ノ中身ヲ踏ミ。右足ニテ尾ヲ踏ム。此トランガ
 ト暴人トノ間。稍後方ニ長四角ノ壁アリ。前面ニ
 ハトランガノ兵器ヲ刻シ。又一白牛アリ。四足ニ
 テ走ル。此武器ノ下ニ一所アリ。日本字ヲ記ス。次

ニ第一ノ臺アリ。冠ヲ戴クノ一人坐ス。鹿ヲ伴フ。抑モ半ト鹿トハ共ニ高麗人ノ神事スル所ナリ。皆高臺上ニアリ。装飾善美ヲ極ム。其下ニ立派ナル四角柱アリ。此トランガハ日本武將ノ一ナリトス。大ニ軍功アリ。分裂セル諸國ヲ一手ニ掌握ス。蓋シ歲月ヲ經ルニ隨テ日本人之ヲ一佛トスル所ナリ。

又バサンヲウモ往時ハ一軍神ナリトノ獨逸人ノ尊奉スル所ナリトリテミウス氏曰ク。バサンヲウハシカムベルスノ王ナルシカクレスノ季子ナリ。父王ノ位ヲ緬ク。大戦効アリ。人民トリル。トノンツノ為ニ身命ヲ抛テ。猛將トボレオン氏ヲ討テ其國ヲ奪領セリ。バサンヲウハ在位三十六年。神事セラレノ采譽ヲ得タリ。之カ為ニ議定スルノ日ヲ公告ス。衆人皆盛服シテ集會セリ。既ニノ忽然身ヲ隱ス。衆其行ヲ所ヲ知ラス。以テ天ニ登ルトス。是古代ヨリト釋教ニセ教徒ノ軍神ナリトスル所ナリ。

然レモフリシウス氏及ブルークホルスト氏ハトランガ寺ヲ側ニ見テ漸ク進テ藤澤ニ着シ。戸

塚程ヶ谷ヲ過キ。神奈川ニ至リ。茲ニ一泊セリ。翌朝^{上途}出立寒ヲ侵シテ海岸ニ浴テ進行ス。日午ニ立^{將軍}派ナル帝家貴女ノ行装ヲ觀ルヲ得タリ。是^{將軍}帝女ノ内裡ニ入輿スルナリト云フ。隨從^者極テ夥シ。諸候ハ馬ニ跨リ金装ノ劍ヲ佩フ。手綱ニハ寶石ヲ鑄ル。他ハ徒行ナリ。亦美装ナリ。兵士或ハ弓矢ヲ携フ。銃手一隊。鎗手一隊ナリ。

三〇

更ニ侍女アリ。從フ美車ニ駕ス牛ニテ引ク。或ハ馬ヲ以テスルアリ。御者先行シテ牛馬ノ手綱ヲ引ク。車ハ兩輪ナリ。輿ハ稀ニハ八角ナル者アレ^レ。此多クハ四角ナリ。側ニ級アリ。以テ昇降ニ便ニス。各隅ニ卧龍アリ。外ニ向テ口ヲ開ク。画樣精巧ナリ。四方ニ錦綉ヲ垂ル。車内四側粉彩ニテ装飾ス。巧ナル画像アリ。此一行連續スル^レ。殆ント三時而ノ後始テ阿蘭使節通行スル^レヲ得タリ。

此ノ如クニノ川崎。品川ヲ經テ十二月三十一日。王城江戸ニ着セリ。大坂ヨリ大道ヲ陸行シタルナリ。蓋シ大坂ヨリ牧方ニ至ル。五里。牧方ヨリ澱ニ至ル。三

里。澁ヨリ伏水ニ至ル。三里。伏水ヨリ京都
ニ至ル。三里。京都ヨリ大津ニ至ル。三里。大
津ヨリ草津ニ至ル。三里半。草津ヨリ石部
ニ至ル。三里。石部ヨリ水口ニ至ル。三里半。
水口ヨリ土山ニ至ル。三里。土山ヨリ坂下
ニ至ル。二里。坂下ヨリ關ニ至ル。二里。關ヨ
リ龜山ニ至ル。一里半。龜山ヨリ石桑師ニ
至ル。二里半。石桑師ヨリ四日市ニ至ル。二
里半。四日市ヨリ桑名ニ至ル。三里。入海ヲ
舟行シテ宮ニ至ル。海上七里。宮ヨリ陸行
鳴海ニ至ル。一里半。鳴海ヨリ池鯉鮓ニ至ル。
二里半。池鯉鮓ヨリ岡崎ニ至ル。三里。岡崎ヨ
リ藤川ニ至ル。一里半。藤川ヨリ赤坂ニ至
ル。二里。赤坂ヨリ御油ニ至ル。一里半。御油
ヨリ吉田ニ至ル。二里半。吉田ヨリ二川ニ
至ル。一里半。二川ヨリ白須賀ニ至ル。一里半。
白須賀ヨリ新居ニ至ル。一里。新居ヨリ舞
坂ニ至ル。海上。一里半。舞坂ヨリ濱松ニ至
ル。三里。濱松ヨリ見附ニ至ル。三里。見附ヨ
リ袋井ニ至ル。一里半。袋井ヨリ掛川ニ至

ル二里掛川ヨリ日及ニ至ル二里日及ヨリ
金谷ニ至ル二里金谷ヨリ島田ニ至ル一里
島田ヨリ藤杖ニ至ル二里藤杖ヨリ岡部
ニ至ル一里半岡部ヨリ鞠子ニ至ル二
里鞠子ヨリ駿河ニ至ル一里駿河ヨリ
江尻ニ至ル三里江尻ヨリ興津ニ至ル
一里興津ヨリ由井ニ至ル二里由井ヨ
リ蒲原ニ至ル一里蒲原ヨリ吉原ニ至

ル二里半吉原ヨリ原ニ至ル二里原ヨリ沼津ニ
至ル一里半沼津ヨリ三島ニ至ル一里半三島ヨ
リ箱根ニ至ル四里箱根ヨリ小田原ニ至ル四里
小田原ヨリ大磯ニ至ル四里大磯ヨリ平塚ニ至
ル二里平塚ヨリ藤澤ニ至ル三里藤澤ヨリ戸塚
ニ至ル二里戸塚ヨリ程ヶ谷ニ至ル二里程ヶ谷
ヨリ神奈川ニ至ル三里神奈川ヨリ川崎ニ至ル
三里川崎ヨリ品川ニ至ル三里品川ヨリ江戸ニ
至ル三里此ノ如キヲ以テ長崎ヨリ江戸ニ至ル
總計三百五十四里ナリ二十五里ヲ一度トス然

概言

レ^ス長崎ヨリ大坂ニ至ル總計二百二十里。大坂ヨリ江戸ニ至ル百三十四里ナリ。是ニ於テフリヒウス氏及ブルークホルスト氏ハ定例東印土會商ノ在留所ニ直チニ至ラジトスルモ能ワス。執政筑後殿^及町奉行三良左衛門殿ニ参着ヲ達セリ。通過スル所ノ市街少ナクモ四里ナリ。人戸稠密。五十四門アリ。夜中之ヲ閉ツ百八十歩毎ニ一門ヲ設ク。既ニ^始僅カキ旅舎ニ至レリ。

江戸ハ北緯三十五度中^西經三十八度ナリ。南海ノ灣ニアリ。各種ノ洲及乾^砂土^堆アリ。故ニ小舟ニ非サレハ着岸スルヲ能ワス。此ノ如ク入海浅ケレ^レ。王^餘魚^類。手^餘魚^類。小^蝦海老。鯨。鱈。鱸。鱒。鰻。鰺。及極テ美味ナル牡蠣ヲ生シ。且廉價ナリ。而シテ日用百物備ハラサルナシ。家^屋稠密。人負衆多ナル所以ナリ。家屋尋常泥墺シ。外ニハ薄板ヲ釘シテ以テ雨ヲ防ク。尋常屋脊鱗次間ニ於テ公候ノ^高宏殿。巨屋突出ス。各部ニ大門アリ。中ニ就テ別ニ一大門アリ。是開ク^一一回ノ^日常ニ之ヲ鎖ス。是^{將軍}帝ヲ尊敬スル爲ニ設クル所ナリ。何トナレハ今一公アリ。邸

宅ヲ建築スルニ方テ一大門ヲ造リ板ニテ之ヲ
密封ス其門彫刻漆塗ス敢テ見ルヲ得カラシム
唯帝^{將軍}ヲ迎テ饗應スル片ニ之ヲ開クノニ平時ハ
之ヲ被包シテ鍍金ノ剥脱スルヲ防ク帝^{將軍}ノ出入
ニ此門ヲ通過スルノニ故ニ之ヲ用フルト一回
ノミナリ

江戸ハ関東ニアリ日本他地ト同シク護壁ヲ設
ケス汗陌分割整然ナリ則チ各町六十間ナリ其
長ハ阿蘭ノ二百尺六十間毎ニ一門アリ夜中點
火シテ警固ス此ニ門ノ間ヲ一町トス番人アリ
テ能ク注目シ事アレハ之ヲ其長ニ通知ス此間
敷ハ營ニ町ノミニ用フルニアラズ更ニ村^落ニモ
野^田ニモ用フルナリ

凡ソ人民都鄙共ニ税ヲ免ス唯地稅ヲ重課スル
ナリ家屋多クハ木造ナリ故ニ江戸及他地ニ火
災多シ延焼或ハ全部ニ亘ルトアリ然レモ尚新
築スル処木造ナリ但シ各街ニ防火^壁倉庫アリ火
災アルニ方テ貴重品ヲ貯^下家人^{下層}ハ下層^ニ住シ
上層ニハ雜具ヲ置ク

海路ヨリ江戸ニ入ルニ左側ニ高繩山アリ其巔

ニ樹木繁茂シ天ヲ衝ク兩峰相歎ツノ間ヨリ瀑
 布アリ急注ス水橋下ヲ過キ人家ニ沿テ海ニ入
 ル此一峰上ニ帝將軍ノ偃息所アリ山麓ニ美麗ナル
 殿堂アリ將軍帝ノ寄附スル所ナリ故ニ帝將軍及其近親
 血族及僧宮城主ノ長ノ外他人ノ之ニ入ルヲ許サス
 トシクワルバ村ハ山後右側ニ在リ樹木美觀ナ
 リ數歩ヲ隔テ東方ニアルギラム村アリ高松樹
 下ニアリ城郭ニハ各所ニ塔アリ樹間ニ隱見ス
 高繩山トトシクワルバトノ間ニトシクワ川ア
 リ江戸ヲ通シテ海ニ入ル九曲ノ川ニ架スル重
 大石橋アリ此橋側河岸ニ森林ノ主監チーロドノ
 宅アリ

稍上邊ニ第二橋アリ此川右側トシクワヤマ村
 ニ注クトシクワヤマニ斜ニ對シテ水路運上役
 所アリ四角ニノ高ク雲ニ聳ユ稍西方ニ港奉行
 ノ居アリ階圓ナリ前面ニ四角ノ塔増アリ
 進テ町ニ入りトシクワ川ニ近接シテ遠見塔増ア
 リ高キ一六十二間一八六尺五寸ナリ常ニ番兵
 千二百人ヲ置ク
 其側東方ニ一ノ堅固ナル警固邸アリ西方ニ列

戸寺院ノ堂宇アリ。或ハ佛ヲ奉シ。或ハ神ヲ奉シ。或ハ魔ヲ奉ス。遙カニ市中ヲ隔テ休息所アリ。屋脊高ク聳ユ。往時將軍東照宮様ノ建築セシ所ナリ。江戸城ノ西ニ豊後公ノ邸アリ。之ニ接シテ將軍ノ園圃アリ。其結構ナルヲ世界七奇觀ノ一ナルセシラニス。王宮モ遙カニ及ハサル所ナリ。天工人工相競テ其巧ヲ極ム。

次テ四國及平戸候ノ邸アリ。執政豊後ノグニ。ホネモ伊賀カムバ。リモ紀伊及對馬共ニ守ヲ附ス。美宅ニ住ス。

稍隔テ美宅アリ。帝城守護役ナル。エトランドノ住ス。南方高所ニ釋迦堂アリ。陸路運上所ニ近接ス。同高地西方ニ各様ノ美宅アリ。諸有司ノ居ナリ。稍下テ壁アル邸アリ。騎兵二千ヲ置ク。三體佛ヲ奉スルノ殿堂アリ。三層高ク雲ヲ衝ク。將軍信長三十。侯ヲ膝下ニ踏ミ。自ラ王冠ヲ戴キ。坊殿堂ノ為ニ。賤ヲ惜マス。以テ名ヲ不朽ニ留メ。トセシ所ナリ。此神ハ日本諸神ニ勝レリ。トシタルニ。千九百八十二年。明智ノ為ニ元ヲ失フヨリ。此法

ヲ廢シ。此殿堂ヲ三體ニ附セリ。

之ヲ距ル。遠カラスノ江戸南部ノ奉行邸アリ。

邸ハ細長クソ。四方鈍ナル塔増アリ。更ニ市中深所。

一向宗ノ寺院ニ所アリ。稍相同シ。共ニ小像ヲ羅

列ス。又延寶師ニ延寶師グリ僧ニ属セルニ寺アリ。此内ニ

唯魔像ヲ安スルノミ。他物ヲ見ス。

此他江戸ニハ各種ノ堂宇アリテ。高山ノ後ニ見

ル其建築ハ皆歩卒三千五百人ヲ養フ其側ニ江

戸南部ヲ主宰スル人ノ邸アリ。凡ソ之ニ属スル

諸士ハ百般ノ事件ヲ聞知スルナリ。

遠見塔増アリ。市中及近傍諸地ヲモ眺望スヘシ。地

形殆ント三角ナリ。兵卒及長官ノ邸アリ。重層塔増

アリ。北方ニ僧官ノ宮殿アリ。四高僧之ニ住ス。殿

堂三アリ。一列ニ併フ。

更ニ奇麗ナル堂宇アリ。或ハ神ヲ奉シ。或ハ佛ヲ

奉ス。抑モ神ト云ヒ佛ト称スルモ一ノ固有名ニ

アラス。蓋シ日本人ハ未来ノ幸福ヲ祈ルヘキヲ

佛ト称シ。又現在ノ諸願例之佳子ヲ求奉メ。賤賣ヲ

好積ミ。位威推ヲ義握ト健康ヲ欲保スル等ハ皆神ニ乞フ

ヘシトス。

此ノ如キ尊称ヲ得ルハ古来皇子皇妃及皇帝ノ
曾テ其生時ニ於テ大名ヲ興スノ事業アリシ者
ナリ其偉勲盛業猶ギ^帝臍^臍及羅旬詩人ノヤチ
ユルニユス^スジユビ^ルテ^ルバキユス^スマルス^ル
キユレス諸神ノ功績ヲ賞讃スルカ如シ
又^{將軍}帝ノ偃息所ノ一例ニ帝妃ノ宮殿アリ三十殿
ニ過ク日本人之ヲカテラント名ク海ニ向テ筑
前候及伊達候ノ美邸アリ大ニ筑前候ニ似ク
唯門高ク塔^増ノ如キヲ以テ異ナリトス
更ニ内部ニ他ノ建築アリ三高塔アリ屋脊最モ

聳ユ是^貴帝妃ノ居ナリ日本ニテハ御臺ト称ス又
肥前候ノ邸モ美ナリ^貴帝妃ノ居ニ接シテ^内火ノ
倉庫アリ日本^{將軍}帝ノ^{財寶}中ヲ藏ス金銀弄ス可ラス
サントマルキユス^ルノ富モボトシ^ルノ鑛坑モ歐
羅巴諸王ノ歳入モ比スヘキニアラス野畜ノ盛
ナル^ル知ルヘシ
^貴帝妃ノ弟ハイグレロダノカハマシゴシハマノ
アイステル王ナリ其隅ニ一大邸アリ又伯父ノ
三宮アリ其第一ハ尾張候ナリ第二ハ水戸候第三
ハ紀伊候ナリ皆將軍様又公方様ト云フノ弟ナ

リ相距ル一遠カラス。記伊候ノ宮ヲ最モ盛大ナ
 リトス。二層屋脊ナリ。將軍様ハ内府様ノ子ニシテ
 父ノ後ヲ継クハ、千六百十六年ニアリ
 又アマングシ候ノ二弟ノ美郎アリ。稍其上ニ博
 多候ノ郎アリ。將軍ノ母ノ父ナリ。更ニ讃岐タシガ及
 大村候ノ郎アリ。又天草五候ノ郎アリ。有馬候ノ
 郎アリ。又第一將軍帝女ノ二郎アリ。壯觀ナリ。北方ニ
 防火塔塔アリ。高サ九十三間。一間ハ六尺半ナリ。上
 ニ説クカ如シ。稍其下ニ日本寡婦ノ寺院アリ。此
 寺ニハ江戸ノ東部ヲ主宰スル人。居近接ス。之ヲ距
 ル一六町ニシテ一寺アリ。四頭ノ佛ヲ安ス。

此方角ノ人家中ニ一寺兀立スルアリ。其廣大美
 麗大ニ驚クヘシ。此所ニ於テ將軍帝ノ第二子。第三子
 諸学ヲ講習スル所ナリ。江戸ノ東端ニ二大寺ア
 リ。共ニ阿彌陀ヲ安ス。然レ此之ヲ區別スルニ一
 ハ唯草ニ阿彌陀ト称シ。一ハ金ノ阿彌陀ト称ス。
 此所ノ末端トシテワラバ村ニ結構ナル建築ア
 リ。江戸東部ノ運上役所ナリ。
 江戸ニテハ金ノ阿彌陀ノ寺ヲ最モ有名トス。其
 佛體驚クヘシ。寺内高阜上ニ安置ス。此阜ハ厚ク

是初公方河邊
の金像

二五

銀板ニテ包ル。此板ニ金片アリ。佛像ノ前後ニ低
ル。阿彌陀ハ馬ニ乘ル。馬ハ六箇ノ首ヲ列ス。一首
毎ニ千年ヲ標ス。阿彌陀ハ馬ニ跨ル。其頭犬首ニ
似タリ。耳ヲ款ク。兩手ニ金ノ篋ヲ持チ。且ツ口ニ
啣ル。然レモ其高價ナル。ハ阿彌陀ノ臍ヨリ低
レ。足ニ至リ。又腹ヨリ低テ。馬ニ至ル。ノ衣ニ及ハ
ス。何トナレハ其衣ハ純金ニシテ。真珠及金剛石ヲ
彩シク。箱スレハナリ。卓ノ下ニ日本字ヲ以テ。佛
教ノ諭語ヲ記ス。是日本佛ノ最貴ナル者トス。日
本人ハ自家ノ幸福ヲ祈ルニ。阿彌陀ノ名ヲ唱フ
ル。ト頻回ナルハ。抑モ何ノ意ナルヤ。悟ル可ラス。
耶蘇教徒口デウエーキノロイウス。其書中ニ記ス
ル。トアリ。

是日本島カンガニ在テ。千五百年六十五年ニ記ス。
所ナリ。曰ク公方ノ妃。其宮中ニ於テ。阿彌陀ヲ奉
スル。一持佛堂ヲ築ケリ。常ニ美婦ニ圍繞セラレ
テ。阿彌陀ヲ禮敬ス。其像美少年ニ似タリ。頭ニ高
價ノ金冠ヲ戴キ。頭ノ周圍ヨリ金光ヲ放ツ。公方
ノ亂。妨人ジアンドノ。及三好殿キ。因テ襲ハレ。逃
亡セシ。片其妃モ。二三婦ヲ伴テ。京都ヲ距ル。ト千

五百歩ノ寺ニ億ル然レモ探訪セラレテジアン
 ドノ及三好殿ノ命ニテ刎頸セラルニ及ヘリ此
 時檢視者ニ請テ紙筆ヲ求メ書ヲニ女子ニ寄ス
 是亦歎乎ニ属シ近傍ノ屋ニ在ル所ナリ其書ニ
 曰ク妾不理ニシテ刎頸セラル然レモ泰然トノ
 死ニ就クナリ阿彌陀ハ無限ノ智識アレハ必
 ス此不幸ヲ察スヘク又導テ極樂土ニ至ラシメ
 永久公方ニ近接スルヲ得ヘカラシムヘキヲ固
 信スト記シ終テ之ヲ封シ僧ニ向テ滯留中ノ厚
 遇ヲ謝シ阿彌陀ヲ禮拜シキヲ天ニ奉テ二回阿
 彌陀ヲ呼テ告別シ僧官長ヲシテ頭髮ヲ剃除セ
 シム是世念消滅ヲ標スルナリ再ヒ室ニ入り又
 手ヲ奉テ阿彌陀ヲ呼フ一ニ回乃チ軍卒ヲノ頭
 ヲ刎セシム

更ニ記スヘキ一アリ阿彌陀ノ像ハ極テ致様アリ
 何ナレハ或ハ五頭ノ馬ニ騎ル所ノ犬首ナ
 ルアリ或ハ少年ノ如キアリ又裸體ニノ耳ヲ穿
 テ彫刻シタル立派ナル菩薩花上ニ卧スナリ又
 異形ノ他佛共ニ併列スルアリ前頭ニ被リ物ヲ
 彫ハ頂上ニ相重疊セル結締アリ頭ハ親愛スヘ

キ少年ニ似タリ耳ニ二環ヲ掛ク一環ハ他環ヲ
通ス頸圍ニ袈裟ヲ掛ケ胸前ニ珠ヲ為ス胸ニハ
長ク細キ板ニテ被フ鱗屑状ナリ肩及背ニハ羽
毛ノ衣ヲ着ク精巧ニ相列次ス手ニ貫珠ヲ持^執ル
羅瑪教徒ノ讀經ニ供スル者ニ異ナラス胸腹非
常ニ肥大ナリ半腹ニシテ二箇ノ大枕ニ終ル其
前面四角ナル石ニ日本字ヲ彫ム阿彌陀ト共ニ
一ノ三頭佛ヲ置クアリ一片ノ被フリ物ヲ戴ク
後頭ハ相接着ス頷ニ鬘アリ頸圍ニ襟ヲ掛クカ
ールテ^刺アル葉ヨリ重疊スルカ如シ又兩側ニ
四臂四脚^手アリ胸及腹ノ上邊五條ノ貫珠ヲ纏フ
又腹ニ代フルニ下體ニ膨脹セル太陽ヲ以テシ
中間ニ異形ノ像ヲ現シ周圍光線放射シテ漸次
ニ微弱トナルアリ壁ニハ高價ナル日本衣ヲ掛
ク而ノ影ク燈燭ヲ照ス

此阜ニ阿彌陀ト称スルト金ノ阿彌陀ト称スル
有名ナルニ寺ノ外部ヲ距ル一四千歩ニ一寺
アリ舊日本^{將軍}帝ノ築ク所ニシテ今尚之ヲ修理ス
ルアリ其寺長サ百四十尺中間非常大ノ楹戸ニ枚
アリ之ニ入レハ大阜アリ内一圖ヲ画ク恐ル

キ異人ノ如シ。耳穿チ頭充シ。頰髭ナシ。印土バル
 ノネノ容姿ニ似タル者坐ス。像上ニ各様ノ帷ヲ
 垂ル。兩側ニ軍裝兵卒銃ヲ持シタルアリ。飛
 躍セル黒牛アリ。老幻術者アリ。又大ニ恐ル一キ
 魔アリ。又旋風晦雲中雷電ノ状アリ。堂内七層階
 アリ。兩側ニ千像列立ス。左側ニ五百。右側ニ五百
 ナリ。皆阿彌陀ノ徒子ナル。觀音羅漢ニ擬ス。各像面容喜
 色アリ。三十臂三十手アリ。而ノ其二ハ適宜大ナ
 レ。他ノ臂手ハ極ノテ小ナリ。又二ハ腰ニアリ。
 每手ニ矢ヲ持リ。其胸ニ七個ノ小人面ヲ刻ス。各

金冠ヲ戴ク。前頭及後頭ニ彫シク金剛石ヲ繫ク。
 更ニ鎖鈴及鐘アリ。又無教ノ像アリ。皆純金ニテ
 製ス。精巧ヲ極ム。觀音堂内金光目ヲ眩ス。
 改ニ日本人諸方ヨリ群集シテ之ヲ拝スルナリ。
 加之更ニ此周圍ニ他ノ寺院アリ。就中觀音堂ヲ
 距ル一羊里ニシテ立派ナル大學校アリ。此大學
 校ハ丘ノ麓ニアリ。教寺ニ分ツ。周圍ニ小川アリ。
 更ニ各種ノ寺院アリ。某寺ニ於テハ日本人魔像
 ヲ拝ス。其画像異様驚怪ス。一シ。丘頂ニ三大堂ア
 リ。其柱ノ大ナル一怪シム。一シ。地上ニ磨キタル尾

ヲ敷ク其一堂内ニ釋迦ノ一大像アリ釋迦ノ兩側ニ小像アリ背後ニ一木葉ヲ立ツ之ニ二千ノ印形アリ現出ス其大サ掌ノ如シ又二歳児ノ像四十アリ堂側ノ兩壁ニ二個ノ魔アリ異容ノ捧ヲ持ツ此諸像及印形皆厚ク鍍金ス

第二堂ニテハ學事修業スルノ大學校ノ規則ノ如ク漸ク進テ最上級ニ至ルヘシ茲ニ教椅子アリ上ヨリ長旗ヲ垂ル上級ノ椅子ニハ師僧坐シ下級ニハ弟子居ル以テ學事ヲ講究ス此堂ハ壁虎ニ寄贈スル所ナリ蓋シ壁虎ハ學者ノ守護神

ナリト信スレハナリ然レハ壁虎ノ像ヲ安スルナク又他神ニ於ケル如ク供物ヲ捧クルニアラズ然レハ天井ニハ蜿蜒セル像ヲ固着ス書生壁虎ヲ信心スレハ其視力及精神天ニ昇ルヘシトス壁虎トハ龍

第三堂ハ他ノ二堂ニ比スレハ廣高大ナリ茲ニハ書生ノ學事ヲ修ムルノ肖像各様ノ画ヲ掲ク堂ノ中間ニ一大書櫃ヲ置ク金彩ヲ飾ル無致ノ書籍アリ之ヲ通覧スルニハ幾百年ヲ要ス一シ書櫃ニハ樞軸ヲ具ス故ニ之ヲ出入スルニ便ニ

ノ随意ニ交換スヘシ。

日本寺院ノ多^{廣大}敷ナルヲ及結構ナルヲ驚歎スルニ堪タリ大室ニハ二十僧ヲ容ル稍小ナレハ十五人或ハ十六人ヲ容ル最モ小ナルハ二人ヲ容ル又此寺院ヲ酒宴ニ供スルヲアリ園中多クハ樹木ヲ植テ其觀ヲ美ニス衆人群集シテ恣ニ飲食シ歡樂ヲ取ルニ適セシム加之放肆ノ極或ハ攻ヲ携フルモ許ス所トナル

ヘシリキハゲナール氏曰ク余大坂^市外ニ於テ六寺ヲ見タリ戸内ニ本像アリ坐スアリ立ツアリ共ニ真大ニ擬ス或ハ其前ニ小箱ヲ置ク日本人之ニ銅貨ヲ投シテ釋迦ノ名ヲ唱フ又一殿堂アリ其中間ニ一急流小川アリ貧婦ハ字ヲ書スル小紙ヲ以流ニ投ス蓋シ祈ル所アルナリ

凡ソ日本寺院ノ建築極テ立派ナリ口デラエーキアルノイダ奈良^興福寺ノ状ヲ記スルヲ極テ詳ナリ以寺ニハ三门アリ各門内ニ廣濶ノ地アリ周圍ニ廊下アリ大柱ヲ建ツ第一ノ入口ニ二級ノ廣キ石段^階アリ上段^階ニ登レハ非常ノニ大像アリ鑄造極テ精巧ナリ共ニ手ニ鍵ヲ執ル蓋シ寺

院ヲ守護スルノ意ヲ表スルナリ。第三門内ニ一
寺アリ。亦石階アリ。非常ニ結構ナリ。寺ノ重扉共
ニ二扇アリ。彫刻極テ精緻ナリ。殿堂ノ中間ニ三
像アリ。共ニ十ル。一フ。一テ。半ノ高サナリ。釋迦
及其子徒アリ。左右ニ立ツ。床ハ四角ナル。大理石ヲ
敷ク。

最モ非常ニ驚クヘキハ七十本ノ杉柱ナリ。其
^ノ精ニノ高ク正立スル。一幾尺ナルヲ知ラス。之
ヲ寺院ノ勘定帳ニ徴スルニ一柱毎ニ五萬ジユ
カ。一テ。ン。ヲ。費。ヤ。ス。ト。周。回。ノ。壁。ニ。ハ。千。體。萬。狀。ノ

彫刻アリテ大ニ觀テ粧飾ス。屋脊ハ石灰製ノ瓦
ニテ葺ク。而シテ石灰ハ交ユルニ沙ヲ以テセス
シテ。搗キ碎キタル紙ヲ以テス。瓦ノ厚サニ指計
ナリ。黒色ノ科ヲ塗ル。画様ノ精緻ナルヲ熟視ス
ル人ヲ驚カス。

此屋脊ハ五百年ヲ經ルモ微損スルヲナシ。且ツ
極テ重ケレド。壁外ニ延フル。一四尺。而シテ屋脊ト
壁トノ間ニ支柱スル者アル。一ナシ。此ノ如キ重
量ヲ支柱スル者ナクノ保持スルノ妙工ハ。歐羅
巴工人ノ企テ及ハサル所ナリ。

寺堂ノ側ニ坊主ノ食堂アリ。頗ル大ナリ。其構造
廣大堅固ナル。本堂ニ譲ラス。長サ四十尺。幅二
十尺ナリ。卧房ヲ分テ二列ト為ス。百八十房アリ。
其外ニ極テ廣大ナル客殿アリ。其一ハ雲中ニ聳
ユ杉柱二十四本アリ。前ニ書庫アリ。多ク日本書
籍ヲ貯ス。

更ニ浴室及百物ヲ藏スル倉庫アリ。庖厨ノ清潔
ナル。記ス所ヲ知ラス。鍋ハ精銅ニテ製ス。高サ
一尺圓形三尺厚サ二指。庖厨ニ浴テ小流アリ。室
内終夜燈ヲ照ス。其數二十四アリ。前ニ池アリ。各

種ノ魚ヲ飼フ。此奥ヲ盜ム者ハ死刑ニ處ス。此洪
福寺ハ建築以來今既ニ七百年ヲ經日本ニハ尚
別ニ此ノ如キ寺アリ。釋迦ノ像ヲ大ニ奉尊スル
ナリ。本同様ノ寡婦ノ築ク所ナリ。全軀鑄造ナリ。
外部鍍金ス。釋迦ノ頭ハ五十歳男ノ状ナリ。額及
頬ニ髭アリ。疎生ス。頭髮ハ短截ス。被フリ物ハ袈
裟ナリ。頸圍ニ金ノ貫珠アリ。寶石ヲ交ユ之ヲ繫
クニ金銀線ニテ織タル紐ヲ以テス。手ヲ^立テ前
ニ向ケ。祈念スルノ状ヲ為ス。指ハ少シク相開ク。
紐ニテ臂ヲ纏フ。而ノ臂紐ニハ長キ總ヲ低ル。釋

迦ハ結伽シ大ナル金板盤上ニアリ其膝及脊後ニ
 二個ノ非常ナル供物盤アリ金板盤上ノ邊ハ四角
 ナリ其外面上縁ニ十二ノ香爐六ノ金罐アリ香
 爐ハ晝夜香ヲ炷ク是ニハ各種ノ香料ヲ供ス袈
 裟ハ四角ニゾ挺出セル足ニ掛リ周圍ニハ日本
 人ノ譬諭ノ語ヲ記ス
 抑モ釋迦ハ底意地悪キ詐欺者ナリ曾テ日輪ヲ
 觀察スルヲアリ往昔ノベータゴラスノ學派ヲ
 信シ殊ニ魂魄不死ニシテ身體ヲ距ル片ハ萬物ニ
 轉位移スルノ説ヲ唱フ

此教ノ蔓延セス又永久存セサルノ理ハ怪シム
 ニ足ラス羅甸人及希希彌人ハ此魂魄轉移ヲ
 固信セリ希希彌人常ニ唱フル所ノ説アリブ
 ラトノ証スル所ニテハホルベウス氏ハ鷓鷓鴒ナリ
木木鳥鳥名白キナリタノーラス氏ハ鷓鴒ナリアヤ
 キス氏ハ獅子ナリアガノムノン氏ハ鷲ナリト
 又アムプロシウス氏ノ説ニテハ希希彌人ノ悲釋釋
 田教派ニテハ世界萬物ノ魂魄ハ蜂或ハ鳥ニ轉移
 スルヲ信ス聽衆ヲシテ喜テ賢コキ語ヲ領知セ
 シノシカ為ニ唱歌ヲ以テ耳ヲ慰メリ然レモ偽

言~~ハ~~者ノ魂魄ハ蛇ニ入り盜賊ノ魂魄ハ狼ニ
 入り詐欺者ノ魂魄ハ狐ニ入ル等總テ類似スル
 ノ獸ニ入ルトスベクゴラス氏及ブラト氏ハ
 ロドチユス氏ノ証スルカ如ク此說ヲ^既平^日ジ^土ブト人
 ヨリ取ル所ナリサモルキス氏ハ之ヲノールテ
 ルゴララシニ弘ム故ニ之ヲ佛朗西及獨逸地方
 ニ於テ廣布セリ西印土人之ヲ信スル^ト何ニヨ
 ルヤ沃土ノパリセーシモ此誤說ヲ取ラスヨセ
 ヒユス氏ニ據レハ七帝ウリアニユスハ^{壘山王}
 カンデルテゴローテノ變身セルナリ是大難ヲ

恐レサル所以ナリト余此魂魄轉移ノ說ヲ証ス
 ルニ羅旬ノニ詩人ヲ以テスヘシオヒジウス^及
 チビユルリユスナリ今之ヲ譯スレハ
 魂魄ハ不死ナリ離去スルナリ永久新居ヲ求
 ム其地ヲ變スレ^凡甚ク遠隔ニ至ラス定居ニ
 返^テフ彼ニ往キ復タ此ニ歸ル既ニ體ニ入り而
 ノ進歩ス野獸ヨリ人身ニ入り或ハ人身ヨリ
 獸體ニ入ル而^テ永久不死ナリ
 右オヒジウス氏ノ詩語ノ意ナリチビユルリユス
 氏ノ詩ニ曰ク

墓ハ骨ヲ蓋フヘシ。永久ノ生命ヲ頭上ニ保持ス。假令變化スルモ尚生ヲ存ス。或ハ馬トナリテ野ニ草ヲ食フ。或ハ牛トナリテ厩ニ立ツ。或ハ氣中ニ在テ上昇下降ス。

此日本ノ釋迦ハアタナシウスキリセリユスニ據レハ印土人ハラマト稱シテユネキネニセムルハシヤガト稱シ支那人ハセンキセント稱ス。支那人ハ釋迦ノ誕生ノ地ヲ印土地方トシテユルノグノクト名ク。又日本人ノ釋迦ヲ説クニ曰ク。其母夢ニ白象ノ先ツ口ヨリ出テ復タ左脇ヨリ出ルヲ見ル。

佛ノ名

印土人殊ニ支那トイテユンシシ。暹羅及皮キ茶ニ於テハ白象ヲ貴重スルハ之カ為ナリ。之ヲ王ナリトシテ尊敬スルナリ。之ヲ飼養スルニ盛膳ニ非サレハ供セス。王公貴人モ大ニ尊敬禮シテ象ヲ拜ス。加之此白象ヨリシテ千元百元七十六年ニ暹羅ト皮キ茶トノ間ニ戦争ヲ起セリ。此戦争ニテハ暹羅皮キ茶ニテ損毛ヲ蒙ムレリ。則チ白象ノ過クル所ノ地稅ヲ皮キ茶ニ納レリ。然レモ此雜談ハ嗣王之ヲ守ラス。却テ昔日之ヲ失シテシヤ

ム王ノ大ニ心痛スル所ノニ白象ヲ取戻セリ。蓋シ此ノ如キ獸ハ天ノ賜フ所ナリトノ非常ノ衆譽トスル所ナリ。

釋迦ハ其信心者ノ意ヲ試ムル第一策ハ母殺シナリ。其降誕スル片右手天ヲ指シ左手地ヲ示シ。屢唱テ曰ク天上地下唯我獨尊ト。後身ヲ深山ニ隱シ書ヲ著ハセリ支那人ノ説ニ據レハ徒弟八萬人ヲ教導ス而ノ其中光ヲ五百人ヲ授拳シ。此五百人中更ニ百人ヲ撰ヒ又百人中十人ヲ撰ヒ新教ノ秘奧ヲ傳ヘリ。又其終焉ニ臨テ其十人ノ手中ニ諸種ノ書ヲ與ヘ尚深山ニ在テ之ヲ講習セシム。且人ヲシテ疑フノ勿ラシメシカ為ニ記証スルノ左ノ如シ。釋迦其信ナルヲ保証ス。

釋迦又曰ク魂魄ハ轉移スルノ八萬回。彼此ノ體ニ入り而ノ着転惡ヲ蒙ルノ六回以テ罪障ヲ消滅スルニ足ルト。最後ニ白象ニ入リ印土印土人之ヲ口ハンフリーラトシテ不変ノ幸福ヲ受ク。然レ此斯ノ如キニ至ルノ前ニ於テ或ハ鳥ト共ニ飛ヒ牛ト共ニ叫ビ魚ト共ニ泳キ蛇ト共ニ這ヒ木ト共ニ發育スルナリ。

此ノ如キ説ヲ耶蘇教徒ヘルミカス氏嘲笑シテ
曰ク余我カ身ヲ顧ミレハ我身ヲ驚怪ス之ヲ何
ト名クヘキヤヲ知ラス或ハ人ナルヤ或ハ犬ナ
ルヤ或ハ狼ナルヤ或ハ牛ナルヤ或ハ鳥ナルヤ
或ハ蛇ナルヤ或ハ龍ナルヤ我能ク此諸體ニ變
スレハナリ凡ソ地上ニアリ或ハ氣中ニ生活ス
一ク又水中ニ存生スヘシ或ハ野獸トナリ或ハ
飼獸トナリ或ハ無聲物トナリ又発聲物トナリ
或ハ事理ヲ辨スル物トナリ又辨セサル物トナ
リ或ハ浮泳シ或ハ飛揚シ或ハ氣中ニ飛ヒ或ハ
地上ニ這フ或ハ歩行シ或ハ静坐シ或ハ植物ト
ナリ樹木トナルト

釋迦ヲ奉スルノ日本人及支那人ハ自ラ謂ク魂
魄樹木或ハ植物ニ轉移ストビリブスマリミユ
ス氏日本紀行中ニ記ス曰ク^{交趾}ニ於テ
千六百三十二年一樹アリ高サ百二十尺太サ之
ニ^{寬永九年}集ス颶風ノ為ニ倒ル百人夫ノカヲ以テスル
モ之ヲ移スヲ得ス是ニ於テ驅魔師^ニテ其動
カサル所以ヲ詰問ス是^{釋教}悲田派ノ虚言ナルヤ^使驅
魔師ノ妄語ナルヤニ関セス日本及支那ニテ信

スル所ニテハ其樹人語ヲ為シテ答テ曰ク余ハ
支那ノ一武士ナリ余カ魂魄百年間各種ノ物體
ヲ經歷スルノ後此樹ニ轉移ス蓋シ國內騷乱戰
争アルヲ避クルカ為ナリト乃チ此虚言ヲ信シ
テ此非常大ノ樹根ニ一盃ノ水ヲ供^ス樹中ニ寓
スルノ武士ノ靈ヲ永ク饒ユル^ト勿ラシメント
ス但シ此ノ如キ^ト獸類ニモ為ス^トアリ
カムサナ^トボルランジユス^ト信スレハノ中ニ
寺アリ坊主住ス寺ノ側ニ阜アリ樹木ヲ多植ス
日々一僧各種ノ食物ヲ盛タルニ盃ヲ捧ク其戸
ニ近クニ當テ鈴ヲ鳴ラス此音ヲ聞テ猫犬山羊
猿猴豚蛇及百般ノ獸類其致三千群集ス則チ之
ニ食物ヲ頒チ共^ニ以テ供膳終ル後坊主復タ鈴ヲ
鳴ラス獸類ハ之ヲ食スルノ後各々其巢窟ニ歸
ル以テ例トス以為ク此内必ラス往時ノ英雄ノ
靈寄寓スル者アリテ禍福前日ニ異ナル者アル
ヘシト
此等ノ説ハ^ニ起ル所タル^ト疑ナシ
而ノ^ニ及^ル羅甸ニ弘法セシニ由ル加之^ニ教ハ各方
及^ル羅甸ニ弘法セシニ由ル加之^ニ教ハ各方

ニ蔓延シ北ハゲートン西ハ獨ヒ及ガルロイセ
ン東ハ印土更ニ進テ支那及日本ニ及ヘリ日本
人ハ印土人ヨリ学フ所ナルハ疑ナキナリ

印土人

ガ印土人ネス氏曰ク或人ハ其惡業ノ為ニ魔ニ變

シ氣中ニ浮泳シ罪障ノ多クニ應シテ苦役セラ
ルニ長短アリ此魔ハ饑餓耐可ラス僅クノ蔬菜
ヲモ食スルヲ得ス唯^{惡善}有^{惡善}志者ノ貧民ニ共アル所
ノ物ノミヲ食シ得ヘシ故ニ死者ノ明友ハ九日
間斑毛鴉ニ食物ヲ施共スルナリ斑毛鴉ヲ飽滿
セシムレハ隨テ魔ノ靈ヲモ慰ムルニ足ルナリ

三

ス此ノ如キ者其教天ヲ恒星及遊星中ニ存ス抑
モ此說ハ舊時ノ望遠鏡學者ノ說ニ根ス蓋シ或
ハ新星ノ生スルマ^ルヲ以テ云フナリ
然レモ能ク教法ヲ固信シ微罪ナキ者ハウエイ
コンタムニ轉移ス茲ニハ諸神ノ群居スル処ナ
リ但シ第二回ノウエイコンタムナリ單ニ斯ク
言ヒ又リアウエイコンタムト稱ス即チ歡樂ノ天
トノ意ナリ初回ヨリシテ誰人モ此地位ニ至ル
トヲ得サルナリ第二說ハ^{印土人}ヲ^{印土人}ネス大ニ爭論
スル所ナリ人或ハ魂魄ノリアウエイコンタムヨ

然此是死ハ其
妻共ニ燔死ス

リ轉移スルヲ駭撃シ或ハ之ヲ排毀ス

又日本人皆盡ク釋迦ヲ信スルニアラス殊ニ法

華宗ニテハ内心ニ或ハ公然トノ魂魄轉移セス

消滅ストスルナリ故ニ此法華宗ニテハ釋迦ヲ

唱ヘスノ經名ヲ稱スルナリ成佛ヲ得ルニハ信

心シテ上ニ記スルカ如ク南無妙法蓮華經ノ字

ヲ連唱スルヲ以テ足レリトス而ノ印土ニ出ル

ノ原意ヲ悟ラサルナリ

印土ニテハ妻ハ夫ト共ニ燔死ス蓋シ釋迦ヲ信

心スルナリ印土ニテハ釋迦ヲラマト稱ス抑モ

此ノ如キ魔ハ人身ヲ現スルナリ然レモ他人

ニ向テ妨害スルナキカ故ニ恐ルヘキニアラ

ス

印土人
又曰ク靈魂罪障消滅スルノ後地

獄ヤムマロコト稱スヲ脱シ再ヒ世上ニ出テ

彼此ノ體ニ入ルヲ得ルナリ然レモ其地獄ニア

ルヤ暗室アタムタツニ往シ東鍼ニ坐シ

鐵嘴鴉獐惡ノ犬骨ヲ刺スノ蚊アリ困苦耐可ラ

ス少休歇ナシ其苦責永連々ス

其安全ナル片ノ豪置ニニ法アリ或ハシユルガ

ハニ轉移セラレ茲ニハ若責セス故ニ死スルノ
ミ苛責スヘキノ罪障ナキナリ然レ氏デドウエ
クエス死シテシユルガムニ到ル者ヲドウエタ
エスト名クハ滞留ノ未魂魄及身體シユルガム
ヨリ出ルヲ得ルナリ此ノ如クニ再生スル
ハ印土人其身如何ナルヤヲ詳カニセス唯
確証シテ曰ク或ハ世ニ出テ再生シ幸福ヲ得但
シ美婦トナルモ子ヲ奉クルナシ但然レ此規則
ハ必ラスシモ一般普通ニアラス或ハ某ノドウ
エタエスバシユルガムニ留止シ茲ニテ子ヲ生
同物ナリ其燔死スルノ状左ノ如シ其婦曾テ夫
ニ誓テ同穴ヲ約スル片ハ決シテ之ヲ破ラス夫
屍ヲ焼クノ同日ニ炭ノ火トナル時ニ直チニ身
ヲ焼キ棄ルナリブラミ子ス及ウエインシアース
ハ之ヲ固執ス然レ氏セツテレアース及ソウド
ラースハ別ノ習慣法アリ則チ夫他所ニ在テ死
シ或ハ既ニ早ク死シタル報告ヲ手ニ握ルヤ
其婦直チニ火ニ入ルナリ市外ニ於テ一大坑ヲ
掘リ火ヲ焼テ屍体ノ紫色トナルヲ候チ而シテ婦
ハ室ニ在リ椅子ニ凭リ美飾ス若シ其人セツト

ラ或ハソラドラ派ナル片ハ一手ニ擲據ヲ執リ
一手ニ鏡ヲ持テ連々ナテイナ或ハラマノ名ヲ
唱フ而メ或ハサ許ノ牛酪ヲ許ノ蔬菜ヲ食ス其
中精神ヲ昏迷スル品ヲ混スルナリ是其婦人ノ
苦痛ヲ叫喚スルヲサナカラシムル為ナリ然レ
ト其婦ブラミネス派ナルカ或ハウエインシア
ス族ニ属スル片ハ紅色ノ花ヲ握リ先テ佛ヲ祈
リ其像ヲ胸ニ掛ケ朋友ニ告別スル後歩ヲ戶外
ニ進メ或ハ美麗ナル衆物ニテ荷ハル満顔喜色
アリ両手及全身破裂スルニ至ル其間ヲマ、ラマ
サルタ、ラマ、ラマサルタ、ノ語ヲ連唱ス則チ
ラマ佛ヲマヨ余ヲ成佛セシメヨ余ヲ成佛セシ
メヨトノ意ナリ此ノ如クニノ大街ヲ通過シ勇
氣ヲ鼓舞スルノ朋友ニ誘引セラレ夫屍ノ焼所
ニ近接ス而メ近傍ニ設クル所ノ水窪ニ来リ身
ヲ洗フ洗後黄色ノ死衣ヲ着ノ貴價ナル衣服及
細具ヲ親戚ニ分配シブラミネスニ夥多ノ狹物
ヲ捧ケ火坑ニ向テ敬禮ス坑ニハ熾炭アリ之ヲ
隔ツニ炭ヲ以テス婦人ノ危懼スルヲ防ク為ナ
リ坑側ニハ坑ヨリ出スノ土アリ山ノ如シ婦此

山ニ上リ再ニ朋友ニ最後ノ告別ス。朋友ハ其婦ノ勇氣ヲ鼓舞スルナリ。而ノ婦ハボラシク即チ拵ト翼及他ノ家具ヲ芑ニ包ミ之ヲ火中ニ投テ自ラ頭上ニ油壺ヲ戴キ其ヤ許ヲ頭上ニ注ク。此等ノ件ヲ終テ後庭ヲ除キ火坑ヲ定視シテ躍テ之ニ入ルナリ。是ニ於テ看護人ハ各焚材ヲ投シテ火勢ノ速カニ休ニ及フヲ期シ灰燼ニレテ埃ヲ

燔死の苦

此ノ如クニノ終焉スル婦ハセツトレアリス。ウエインシアリス。或ハソートラリスノ族ナリ。又ブラミネス派ノ婦ハ更ニ残酷ナル死ニ就クナリ。則チ其男ト共ニ踏張リ板ニ上リテ坐シ。兩体共ニ積薪中ニ在リ。頭上ニヤ許ノバルボイセン油ノ松脂ヲ注ク。準備既ニ終ル後婦ノ危懼シテ後悔スルアリ。然ルハフヲミホハ火勢ヲ止メ徐々ニ死ニ就カシム。但シ苦痛最モ甚シ。

燔死の苦

此燔死ノ外別ニ一種ノ婦人ノ死法アリ。則チ笛聲鼓聲ニ乘シテ婦人坑内ニ入り。夫ノ屍ニ接シ立チ漸次ニ土ヲ掘ケ坑底ニ坐シ屍体ヲ抱キ満壚ノ火ニ香ヲ炷キ次第ニ坑ヲ埋メシム。婦自ラ

玉ヲ搔キ集ノ半身ニ至ルニ及テ衣ヲ脱シテ坑
口ニ張り劇毒ヲ服シ頸衣後ニ出ス
日本人ノ同シク釋迦ヲ奉スル者男子ニテモ女
子ニテモ此ノ如キ残酷ナル所業ヲ為ス者アリ
是自ラ以テ無上ノ業ヲ行ヒテ深坑ニ入り之
ニ埋没スルアリ唯一ノ小氣道ヲ存ス但シ饑餓
スルカ為ニ死ス江戸ノ外ニ於テハ此法ヲ目
殺スルノ例屢聞ク所ナリ
再ヒ使節ヒリシウス氏及ブルトクホルスト氏
ノ話ニ及フ一シ則チ其到着ヲ筑後殿及三郎左

千六百三年

衛門殿ニ報知ス十二月三十一日ナリ
十年一月二十九日ニ至ルマテ江戸ニテ東印土
商會ノ定泊所ニアリ日本皇帝ニ進物ヲ捧クル
ノ業ヲ得タリ奉書曰ク明朝登城親シク進物
ヲ捧クルノ預備ヲ為ス一シト依テ兩使ハ風呂
日本人ハ浴槽ヲ新ク名リニ入り身ヲ清潔ニス
凡ソ帝前ニ伺候スル人ハ皆日々洗浴セサルモ
ノナシ
フリシウス氏及ブルトクホルスト氏ハ筑後殿
ノ奉書ニ因テ是時ニ準備セリ抑モ何故ニ日本

將軍 帝ハ不都合ナリトシテ今日迄拜謁ノ期ヲ遅延
 セシヤ。若シ夫レ最好時節ヲ待タハ二月ヲモ經
 過スヘキナリ。四月六日使節トナリ朝執政及ヒ
 幼帝將軍得未タル全健康ヲニ進物ヲ捧リ翌日九時兩
 使ハ乘物ニテ登城ス他ハ徒行ス市街ニハ人民聚
 觀堵ノ如シ宮殿ニ近クニ及テ共ニ乘物ヨリ出
 ツ大室ニ入ル半ハ漆塗ス半ハ精筵ヲ敷ニ三
 人ノ警固者アリ是ヨリ美室ニ誘ワル然レ氏大
 ニ相隔離ス待ツト一時半ニ先ツヒリモウス
 氏次テブルトクホルスト氏四執政ニ謁ス四執

政將軍 皇帝ニ上申ス使節ハ進物ヲ捧ケ隨テ幼帝ニ
 モ捧ケリ。

久シカラスノ説話止ミ兩使ハ許可ヲ得テ旅舎
 ニ歸レリ唯商人ユルネリスエド氏乃阿蘭銀
 エノミ遺リテ献上品中ノ銀船ノ取扱方及帆ヲ
 張ルノ狀尋テ日本人ニ傳達ス以教諭ノ為ニ
 二時ヲ費ヤシ歸舎セリ。

日本將軍 皇帝宮殿ハ非常ニ驚クヘキナリ外壁ノ外
 ニ堅固ナル柵アリ幾尺ノ溝アリ以溝ト柵トノ
 間ニ廣道アリ日々數千ノ乘物及無數ノ人員彼

皇軍殿

過クレハ。廣大ナル空地アリ。直チニ前行ス。目ヲ
 極テ將軍帝ノ偃息所。極テ高キ塔塔及樹木アリ。嚴重ナ
 ル壁ヲ構フ。左側ハ壁大ニ曲リ。右側ハ平ニノ同
 シ。彼此ニ丘後ニアリ。茲ニ將軍帝ノ殿堂アリ。第三門
 ノ後ニ將軍帝ノ玄關アリ。第一ノ玄關ハ四角ナリ。其
 奥房ニハ二十八本ノ杉柱アリ。周圍閑豁ナリ。屋
 脊ハ稍斜ナリ。而ノ更ニ第二ノ建物アリ。壁ニテ
 護ス。第二ノ屋脊四隅突出ス。第一ニ併セテ他ノ
 玄關ヲ見ル。第一房ハ前ニアリ。四柱ヲ具ス。亦四
 方閑豁ナリ。然レ此後ニハ新建築ノ為ニ壁ニテ

鎖ヲ共ニ四角ニノ高シ。

此玄關前ハ園圃ニテ大ニ慰樂スヘシ。閑豁ナル
 地ヲ眺望スヘシ。其園圃ハ天工人工。財力ヲ惜マ
 ス。園ノ所ナリ。逕ニハ樹木ヲ植ユ。奇麗ニ花壇ヲ
 分ツ。園ノ右側ニ丘アリ。其頂上ニ殿堂アリ。是將軍祖
 先ノ神ヲ奉スル所ナリ。

但シ上ニ記スル第三門ノ左側ニハ。極テ美麗ナ
 ル宮殿アリ。前殿ハ二重屋脊ニテ。他殿ニ跨ル。其
 下縁ニ四方大ナル金物ヲ具ス。
 第一屋脊ニ第二ノ建築アリ。茲ニ極テ結構ナル

粧飾及美麗ナル景色アリテ上ニ記スル用路地
又三重ノ半圓形ノ構ヲ見ル此第一宮殿ト第三
内壁トノ間ニ護衛兵アリ以テ内壁ヲ警固シ日
々交代ス其兵三千ナリ第一宮殿ニ次テ第二宮
殿アリ長サ相同シ然レモ高サ均シカラス屋脊
ハ共ニ金光燦爛タリ此兩宮殿間ニ結構ナル建
物アリ塔ノ如シ此諸建物ハ將軍ノ親近血族ノ住
居スル所ナリ

此後ニ驚ク一キ建帝居アリ兀立ス就中三塔塔アリ
最モ高シ皆四角ナリ九層ニノ天ニ達ス各室上

ニ屋脊側壁外ニ突出スル一ニ尺上ニ隨テ
漸次ニ小ナリ中塔塔最モ大ナリ其夫端ニ極テ結
構ナル非常重大ナル鯨魚立ヲ共ニ厚キ金板ニ
テ被フ所ナリ中塔塔ノ直前ニ結構ナル奏向所ア
リ鍍金ノ柱ナリ天井ニハ諸般ノ画様ヲ雕刻シ
全彩紛亂ス屋脊ヨリ金光ヲ放ツ是日本將軍ノ外
國使節又内國人ニテハ皇族王族ニ對スル片出
座スル所ナリ其側ニ立派ナル奥向建物アリ各
室ニ區分ス

ヒリシウス氏及ブルークホルスト氏兩使君ハ四

月七日ニ四執政ニ謁シ退出スル後翌日再ヒ苑
 後殿及三郎左衛門殿ノ指圖ニ依リ乘物ニ乘リ
 從者ハ騎馬ニテ登城シ上ノ宮殿ニテ告別セリ
 ヒリシウス氏先ヲ執政ニ謁シ次ニブルークホ
 ルスト氏亦然リ應接異ナルヲナシ兩使節ハ日
 本^{將軍}帝ヨリ答禮トシテ絹ノ^{時版}外套ヲ賜レリ且長崎
 ニ歸ルヘキ許可ヲ得タリ
 然レモ江戸ヲ出立スルノ前ニ教員ノ執政邸ニ
 至リ謝辭ヲ述ヘサルヲ得ス四月十六日準備成
 ル若シ夫レ使節數回^{將軍}帝ニ謁スルヲナカリセハ

^{將軍}帝父ノ廟所ニ參詣スルヲ得タル容易ナリシ
 ナルヘシ是江戸ヲ距ルヲ四日程山丘ニアリ山
 麓ニ重壁圍繞ス壁間ニ四角ナル廣キ門アリ厚
 キ重扉アリ兩側ニ二個ノカドニレシアリ内
 方ハ壁ニ向テ築ク共ニ高ク四角ナリ上層屋脊
 ノ外縁ニ金ノ被ヒ物アリ左側ニハ廣キ石道ア
 リ兩外縁ニハ欄アリテ之ヲ護ス此道ヨリ岡ニ
 上ル四十級アリ以テ第二門ニ至ル兩側ニ鍍金
 セル塊アリ尖端漸ク細シ是ニ於テニ壁ヲ以テ
 岡ヲ分割ス左ニハ細長キ殿堂アリ右側ニハ密

樹蔚蒼々リ。此樹外ノ道ヲ進メハ立派ナル堂アリ。蛇^{羊腸}狀ノ迂^道路ヲ過テ第三門ニ達ス。二個ノ石壁ヲ過テ進行ス。中間ニ廟所ニ向フノ小道アリ。岡ノ高所ノ陰ニ廟所アリ。此廟所ハ實ニ精巧ヲ極ムル所ナリ。四塔アリ。高ク天ニ聳ユ。中間高價ナル建物アリテ相連續ス。高塔ノ内ニ遺骸ヲ藏ス。茲ニ百五十燈ヲ掲ケ晝夜火ヲ點ス。

日本^{將軍}ハ貴人ノ重大事件アリテ犠牲ト為ス。キヲ祖先ノ靈ニ告クルニ非サルヨリハ茲ニ至ルナシ。犠牲ハ第一門傍ニ設タル禮拜殿内ニ

置テ長ク禮拜スルナリ。下ノ表通ハ八個ノ四角ナル柱ヲ具ス。竿ハ壁ヲ環テ各種ノ間ハ立派ニ粉粧ス。扉ハ二重ナリ。双方柱ノ中間ニ二扇相集合ス。屋脊ノ縁ニハ鍍金セル画樣ヲ粧飾ス。下層ハ第二建物ヲ支フ。分テ教室ト為ス。

此禮拜堂ニ銅製ノ燈籠アリ。是^享千五百三十六年^年東印土高會ヨリフランシスコシスカロン氏ヲシテ日本^{將軍}ニ獻セシメシ所ナリ。此燈籠ニハ三十枝アリ。其重サ七百九十六磅ナリ。政時カロン氏ヨリ日本^{將軍}ニ併セテ獻スル所ノ二個ノ大ナル^波伯

新 天車アルカラ一
不 詳 一片ノ黒色普魯社尺鷲
 絨十二ノ亜鉛ルルス
不 詳 又各種羅紗十四枚ナ
 リ。執政讚政殿。大政殿。アクトドノ加賀殿。スイ
 キモンドノ伊豆殿。志摩殿。豊後殿。トリウシマ。備
 中殿。大藏殿。ネーシンドノ及。デイシンドノ各々
 進物アリ。日本参政以下ノ職ニハ及ハス
 抑モ日本人ハ非常ニ名ヲボルノ性アリ。故ニ
 送葬ニモ巨額ヲ費ヤスナリ。高貴人ノ送葬。左ノ
 如シ。送葬前一時ニ親族朋友死者ノ家ニ會ス。皆
 白絹ヲ服ス。是喪服ナリ。又親戚及朋友ナル婦人
 モ相續ク頭上ニ各色ノ被フリ物ヲ戴ク。非常ニ
 富豪ヲ誘リ杉木ヲ以テ巧ニ造レル高價ナル乘
 物ニテ荷フ。而ノ多人隨行ス。

次テ大和尚アリ。常ニ遺骸ニ接近從事ス。是亦乘
 物ニ乘リ。粧飾燦然タリ。三十僧アリ。側ニアリ。頭
 上ニ廣キ帽ヲ蒙ル。腹ニハ木綿ノ肌着ヲ服シ
 此肌着ノ上ニ黒色ノ精緻ナル外套ヲ服ス。外套
 ハ灰色ノ上着ノ下ニ隠ル。手ニ長キ松枝ノ炬火
 ヲ持ツ。是道ヲ照ラシテ。送歩勿ラシムル為ナリ。
 此三十僧ニ次テ更ニ二百僧アリ。隨從ス。此輩唯

其死者ノ生時ニ於テ常ニ信仰スル所ノ佛名ヲ
 又復連唱スルノ外他事ヲ為サズ又大鐘ヲ鳴ラ
 シ及二個ノ廣キ紙製ノ籠ヲ荷フ此内ニハ各色
 紙製ノ蓮花瓣ヲ盛ル此籠ハ長棍ニ固繫ス則チ
 且振り且歩行スレハ花瓣散飛スルナリ是死者
 ノ靈魂極樂ニ至ルノ兆ナリ此籠ヲ振ルノ僧ニ
 次テ他ノ推僧八人アリ二行ニ併列ス共ニ旗ヲ
 附タル長キ竹ヲ持ツ是ニハ佛名ヲ記スルナリ
 又燭ヲ點スルノ燈十個アリ此燈ニ浴テ二少年
 灰色衣ヲ着ケ松炬ヲ持ツ但シ火ヲ點セス市街

ヲ出テ其炬ニ點火シ以テ屍ヲ焚クニ供ス

屍體ニ隨テ群人之ヲ送ル皆灰白衣ヲ着ク頭上

ニ小帽ヲ戴キ領下ニ結締ス帽ハ三角狀ナリ黒

色ノ光輝アル革ニテ製ス之ニ紙札ヲ貼ス亦死

者ノ曾テ信仰スル所ノ佛名ヲ記スルナリ此ノ

如クニノ多人經過セシ後一人アリ高ク大札ヲ

捧ク之ニモ亦佛名ヲ記スル所ナリ

既ニノ四人ニテ柩ヲ荷フ屍ハ此柩内ニ在テ坐

シ頭ヲ前ニ傾ケ兩手ヲ組ミ參佛スルノ狀ヲ為

シ白衣ヲ着ケ紙製ノ外套ヲ被フ而ノ死者生時

ニ於テ信仰セシ佛ニ奉スルノ經文ヲ記スル人
書冊ヲ以テ體ヲ埋ム。蓋シ平日信仰スルノ佛最
モ幸福ヲ興フヘシトスレハナリ。炬ニ接シテ盛
粧セル其子立ヲ最モ少年ノ子松炬ヲ持執ル以テ
焚杖ニ火ヲ照スルニ供ス。最後ニ一般送者隨フ。
皆頭上ニ上ニ記スル三角狀革製帽笠ヲ戴ク。
焚所ニ至レハ衆人皆之ヲ圍繞シ叶舞舞ス。僧ハ銅
盤及鐘ヲ鳴ラシ異口同音佛名ヲ唱フル。一
一時此時焚坑ノ裏置たノ如シ四方開豁ノ地ニ
於テ廣キ格子ト建ニテ圍ヒ四方ニ入口ヲ設ク。

東西南北ナリ中部ニ四所アリ焚杖ヲ盈ツ上邊
ニ幕ヲ張ル。四所ノ兩側ニ一札アリ。諸種ノ食物
ヲ備ク。多クハ血ヲ以テ捏ネタルナリ而シ菓糕
及果實ナリ。絶テ魚類及獸肉ヲ供スルナシ。又
此札ニ香爐及香料ヲ具ス。既ニ焚所ニ近接スレ
ハ炬ニ長キ繩ヲ繫キ各人此繩ヲ執リ一齊ニ佛
名ヲ唱フ。死者ヲ尊敬スルニ愈厚ケレハ唱名ス
ルニ愈久シ而シ外圍ヲ廻歩スルニ三回。
終ニ炬ヲ焚杖上ニ置キ坊主來テ講講句ヲ唱フ。其
語傍人ニハ解スルヲ得ス。乃チ炬火ヲ以テ死ノ

頭上ニ旋轉スルヲ三回ナリ蓋シ魂魄昭ナク終
ナキノ意ヲ表スルノ語ヲ唱ヘテ其炬ヲ投スニ
人ノ血族一ハ柩ノ東方ニ立テ一ハ西方ニ立テ
而ノ共ニ焚朽ヲ集積シテ三堆トナシ一齊ニ炬
ヲ投シテ之ヲ焚ク此時別人アリテ油ヲ焚朽ニ
注キ且香料ヲ注ク忽チ見ル火焰天ヲ衝燒キ遺屍
變シテ灰トナル

其子及血族ハ二札ノ傍ニ在テ柩ヲ燒キ屍ノ靈
魂天堂ニ上ルヲ禮拜ス禮拜祈念終ル後坊主ハ
其身位ニ應シテ各々謝儀ヲ受ク葬事ヲ擔當ス

